
バカとテストと召喚獣 ~ とある弟の物語 ~

なこと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣とある弟の物語

【Nコード】

N7818K

【作者名】

なご

【あらすじ】

注意、この作品は主に作者の妄想と欲望と願望で構成されています、メタルギアソリットの成分が若干入っております

木下家の次男に生まれ、ちよつとした理由で精神年齢と体格が少しと言つか思いつきり子供な主人公「木下勇希」が文月学園で過ごすちよつぴりおバかな物語

祝十万PV、一万ユニーク！

これからもよろしくお願いします

ぶろろーぐ(前書き)

初小説です。生暖かい目で見てください。

ぶるるーぐ

いつもどりの朝、秀吉はキッチンで朝食と弁当を作っていた

「うむ・・・こんなもんじゃろ」

調理が終わわり朝食をテーブルに並べ終わる・・・が肝心の姉と弟がまだ来ない。

「まったく・・・まだ寝ておるのか？世話が焼けるのう」

そう言うと秀吉はまず姉である木下優子の部屋へ向かった。

「姉上！朝食が出来ておるぞ？早く起きて朝食を食べるのじゃ！」

聞こえていたのか布団から手だけを出し返事をして見せた。

「本当に分かっておるのかのう・・・？」

そう言うと秀吉は弟の木下勇希の部屋に向かった

「勇希！もう朝じゃ、早く起きて朝食を食べるのじゃ」

「うん・・・後5分」

「いつもそう言っておきながらずっと寝るのは誰じゃったかのう？」

秀吉はそう言うと勇希の掛け布団の端っこを掴み思いっきりめくった。

「うう・・・お兄ちゃんおはよう・・・」

「ようやく起きたか・・・さ、早く着替えてご飯を食べるのじゃ」

「はい・・・ふあゝ・・・」

勇希はまだ眠たいのか、閉じそうな瞼を擦りながら着替え始めた。

ちなみに、着替える途中クローゼットのドアに足をぶつけて半泣きになりながら着替えていた。

「お姉ちゃん、お兄ちゃんおはよ〜」

勇希はそう言いついながら料理が並べられているテーブルに座った

「それじゃ、全員揃った所で食べましょうか」

「そっじゃな」

「「「いただきます」」」

「そろそろ学校に行くわよ？勇希、早く支度してきなさい」

「はい」

勇希はそう言うと走って自分の部屋に向かった。

途中、ズテツ！ゴツツ！と言う音が聞こえてきたが優子は笑っていた

優子、秀吉、勇希の三人は通学路を歩いていた。

「秀吉、クラスは何処だと思っ？」

「ワシはFクラスかのう・・・姉上はどうじゃ？」

「私？私はAクラスかな」

「お姉ちゃん頭いいもんね！」

「ふふ・・・ありがとう」

「勇希はどこかの？」

「うん・・・多分お兄ちゃんと一緒だよ！」

「一緒に慣れたらよいな」

秀吉は嬉しそうな顔をしながらそう答えた。

そう話している内に校門と文月学園が誇る鬼の生徒指導「西村宗一」

先生が見えてきた。

「先生、おはようございまーす！」

「西村先生おはようございます」

「おー、木下姉弟か、おはよう、相変わらず勇希は元気がいいな」

西村先生は笑いながらそう言った。

「・・・／／／」

勇希は恥ずかしいのか、秀吉の背中に隠れてしまった。

「西村先生、クラス分け貰えますか？」

「ん？おおそうだったな・・・ほらお前達のクラスだ」

木下姉弟は、西村先生からそれぞれクラス分けを受け取った

「いつも言っているが頭のいい奴からA、悪い奴が最下層のFになるからな」

「姉上、どうじゃった？」

「もちろんAクラスね、秀吉は？」

「Fクラスじゃ・・・勇希はどうじゃった？」

「お兄ちゃんと一緒に！」

勇希は満面の笑みで秀吉に言った。

「よかったのう、これから一年よろしく頼むぞ？」

「うん！」

秀吉も相当嬉しかったのか顔が凄い笑顔だった

「秀吉、勇希の事頼んだわよ？」

「任せておいてくれ、姉上」

優子は仕方ないか・・・と言う様な表情で言った

「お前達、早く行かないと遅刻するぞ？」

西村先生に言われて木下姉弟は時計を見た。

「うむ、結構時間を食ってしまったのう」

「ならもう行きましようか」

「はい」

そして、木下姉弟は自分達の教室がある校舎に向かった

友達たくさん出来るかな？（前書き）

二話投稿、ちなみに私の作品は多分原作ブレイカー

友達たくさん出来るかな？

校舎に向かった勇希達はAクラスの前にいた。

「ノートPC、エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート……A
クラスは凄いのう、まるでホテルのスイートルームじゃ……」

「いいな……」

「うらやましいなら、来年こそAクラスに来ることね、それならみ
んな一緒にこの教室で過ごせるわよ？」

「そうじゃな」

「がんばる！」

「がんばりなさい」

「それじゃ姉上、ワシらはもう行くのじゃ」

「ええ、それじゃまた放課後に会いましょう」

「またねー」

優子は微笑みながら勇希達に手を振って見送った

「さて、ここがワシらの教室じゃな」

「すぐく古そうだね・・・」

「うむ・・・まあ入ってみるかの」

「・・・」

勇希は、秀吉の背中に隠れ一緒に教室に入ってしまった

中に入って教室を見渡せば知り合いが結構いた。

「おお！秀吉に勇希じゃないか！お前達もFクラスか？」

「なんじゃ雄二もFクラスじゃったのか・・・そうじゃよ、兄弟揃ってFクラスじゃ、お主は確か去年何か企んでおったな？何をする気じゃ？」

教室に入ると、去年同じクラスだった「坂本 雄二」が話しかけてきた。

「ああそのことは後で話すから楽しみにしておけ、なにはともあれ今年一年よろしく頼むぞ？秀吉、勇希」

「うむ」

「よろしくねー」

「おはよー」

しばらく三人で話していると、去年同じクラスだった「吉井 明久」が話しかけてきた。

「何だ馬鹿」

「何でいきなり会って一言目は馬鹿なのさ!？」

「仕方なかるう、馬鹿なんじゃし」

「明久お兄ちゃん、おはようー」

「ああ！勇希だけだよ！僕の癒しは!！」

明久はそう言うのと勇希に抱きついた。

「ふみゆ!？」

「あ、明久!？勇希から離れるのじゃ!！」

そうやって騒いでる内に担任の「福原 慎」先生が教室に入ってきた。

「席についてください、HRを始めますよ」

福原先生がそう言うのとFクラスの生徒は席に着いた。

「おはようございます、2年F組の担任の・・・」

黒板に名前を書こうとチョークを使ったらバキッ!という音が教室に鳴り響いた。

「福原慎です、よろしくおねがいます」

これからの学園生活は大丈夫なのか？と思った秀吉と勇希であった。

友達たくさん出来るかな？（後書き）

始めてやる事は疲れますね

自己紹介は大切です（前書き）

問題

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい』

姫路瑞樹の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけかりませんでしたね。

木下勇希の答え

『問題点……ガス漏れしていた』

教師のコメント

ガスの点検は大切ですが、間違いです

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払ってなかった事』

教師のコメント

そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（ すごく強い）

教師のコメント

すごく強いと言われても

自己紹介は大切です

「それでは自己紹介をお願いします」

そう言われ次々自己紹介していき、秀吉の番になった。

「木下秀吉じゃ、部活は演劇部に入っており、今年一年よろしくの」

秀吉の自己紹介が終わると次は勇希の番になった

「き、木下勇希ですっ！部活はえ、演劇部に入ってます！よ、よろしくお願いしましゅ！？」

最後に噛んでしまったのが恥ずかしかったのか、自己紹介が終わると顔を真っ赤にして秀吉にすがり付いていた。

「こんな奴じゃがよろしく頼むのじゃ」

秀吉は勇希の頭を撫でながらそういった。だがしかし、教室はそれどころじゃなかった。

「なにあれかわいい・・・」

「勇希君か・・・アリだな」

「弟になってくれー！」

カオスである。

しばらくして落ち着いてきたので自己紹介が再開された。
次に立ったのは「土屋康太」である。

「・・・土屋康太」

余談だが勇希と結構仲のいい友達である

次々に自己紹介が終わり次に立ったのは「島田美波」、このFクラスで数少ない癒しの一人？だ

「島田美波です、海外育ちで、日本語の読み書きは苦手です、趣味は吉井明久を殴ることです」

この自己紹介を聞いて勇希は軽く怯えて更に秀吉にくっついてた。

自己紹介が終わり席に着くと次は「吉井明久」が席を立った

「え、吉井明久です。気軽にダーリンって呼んでくださいね！」

「ダーリーリン！」

野太い声が教室に響き渡り明久の顔が引きつっていた。

「・・・失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします」

そう言うと静かに席に座った。

明久が座ると同時に教室のドアが開き誰かが入ってきた。

「あ・・・おくれてすいま・・・せん」

クラスの空気が凍りつく。

「ちょうど自己紹介をしているところなので、あなたもお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます、よろしくお願いします・・・」

入学最初のテストで学年2位の「姫路瑞希」が入って来た。

そして順調に自己紹介が終わり一番最後の雄二の番になった。

「Fクラス代表坂本雄二だ、代表でも坂本でも好きなようによんでくれ、さて、みんなに一つ聞きたいAクラスは冷暖房完備の上に座席はリクライニングシートらしいが・・・不満はないか？」

雄二の問いかけにクラスのメンバーが答える。

「・・・大ありじゃっ！！！！」

「そこで代表としての提案だが、FクラスはAクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けたいと思う！」

勇希は秀吉と折り紙で遊んでいた。

自己紹介は大切です（後書き）

疲れました

ちびっこ応援団（前書き）

問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい

- （１）得意な事でも失敗してしまう事
- （２）悪い事があつたうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希の答え

- （１）弘法も筆の誤り
- （２）泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも（１）なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”、（２）なら“踏んだり蹴ったり”や“弱り目に祟り目”などがありますね。

木下勇希の答え

- （２）泣きつ面にお姉ちゃん

教師のコメント

お姉ちゃんに失礼です

吉井明久の答え

- （２）泣きつ面蹴ったり

教師のコメント

君は鬼ですか

土屋康太の答え

(1) 弘法の川流れ

教師のコメント

シユールな光景ですね

ちびっこ応援団

「Fクラスは、Aクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う」

それを聞いた途端教室中から文句の嵐が飛び交った

「勝てるわけが無い！」

「設備をこれ以上悪くするつもりか!？」

「姫路さんと勇希君が居たら何もいらぬ！」

最後のはともかくそう言いたくなるのは当たり前だろう、FクラスがAクラスに召喚戦争を仕掛けるなんて前代未聞、尚且つ普通の人なら勝てるわけがないと言っただろう。だがクラス代表の雄二はまったく動じる事無く、教室が落ち着くまで立っていた。

そして教室が静かになると同時に顔に笑みを作っていた。

「皆がそう言うのも分かる・・・だが!このクラスには勝てる要素が揃ってる!だからこそその発案だ。それを今から説明してやる。」

するとクラスが詳しく聞かせると言わんばかりに静かになった。その変化に勇希と秀吉も気づいたのか折り紙をやめ、雄二を見つめていた。

「まずは康太!いつまでも姫路のスカート覗いてないで前に出て来い!」

「・・・!!(ブン!ブン!)」

「は、はわっ!?!」

畳に頬をくつつけてまで瑞希のスカートを覗いていたことを指摘され必死に否定する少年。どう頑張っても頬の畳の跡は消えず勇希にも一言「康太お兄ちゃん駄目だよ?」と言われ軽く落ち込んでいるがしつかりと前には出てきた。

「紹介しよう、こいつが有名なムツツリー二だ」

「・・・!!!(ブン!ブン!ブン!)」

その名前を聞いた途端クラスがざわめいた。

男子から畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を持ってあげられており、その正体は謎のヒーローとも言われれば極悪人とも言われる人物が目の前にいるのだ。

「バカな・・・本当にアイツがムツツリー二なのか?」

「だが見てみる、頬の畳の跡を必死に隠す姿・・・まさにムツツリだ!」

「お兄ちゃん、康太お兄ちゃんって有名人だったんだね」

「そうみたいじゃな」

だが、皆はそれだけじゃ無理だろう、と言いたげな目をしている

「まあ、まてまて、姫路の事は言わなくても分かるだろ？」

「えっ！？わ、私ですか！？」

「ああ、主戦力だ、期待してるぞ？」

その時クラスがドツ！と盛り上がった。

「そうだ！うちには実質Aクラスの姫路さんがいるんだ！」

「彼女ならAクラスにも引けは取らない」

「それに木下兄弟も居る、もちろん俺も全力を尽くす」

「ん？木下は分かるが勇希君は何か凄いのか？」

「それなら大丈夫だ、勇希には応援団をやってもらう」

「……………応援団？」

クラスの皆がそう言っていると秀吉の後ろに隠れている勇希を見つめた。

「あう……／／／」

勇希は秀吉に背中を押され前に出た。

顔は真っ赤である。

「ぼ、僕応援一生懸命頑張りますっ！／／／」

そう言いつとすぐ秀吉の後ろに隠れてしまった。

「よく頑張ったのう」

秀吉はそう言いながら勇希の頭を撫でていた。顔が凄くいい笑顔になっていた。

それは秀吉に限らずクラスの皆も秀吉と同じく優しく微笑んでいた。

「こんな奴に応援してもらえるんだ、なにか文句はあるか？」

「「「あるわけが無いだろう」「」」

全一致で賛成だった

「勇希君に応援してもらえて更に姫路さんと木下、それに確か坂本は小学校の頃神童とまで言われてなかったか？」

「と言うことは実質Aクラスが二人いるってことか？」

「これはいけるんじゃないか？」

「ああ！これはいけるぞ！」

その言葉を皮切りにクラスのテンションがピークに達した。だが雄二の一言によりクラスは一気に静かになる。

「それにこのクラスには吉井明久もいる」

クラスが静かになった、勇希が埃のせいかクチュンツ！と言つくしやみの音が響いた。

空気が少し緩くなった。

「ちょっと雄二！なんでそこで僕の名前を出すのさ!？」

「明久のことを知らないなら教えてやる、明久は「観察処分者」だ」

「ん？観察処分者ってバカの代名詞じゃ・・・」

「ち、違うよ！ちょっとお茶目な16歳に付けられる・・・」

「そうだ、真性のバカに付けられる肩書きだ。ハンデにはちょうどいいだろ？」

雄二はそういいながら笑っていた。

「肯定するな！もうちょっとソフトに表現してよ!」

「でも、明久お兄ちゃんの召喚獣物に触れるんでしょう?いいな・・・」

「うう・・・そう言ってくれるのは勇希だけだよ!やっぱり勇希は僕の癒しだ!」

勇希の言葉にまた感激したのか、また勇希に抱きついた。

「ふみゆ!？」

「これ明久!また勇希に抱きつきおったな!？はよう離れるのじゃ!」

また騒ぎが起きたが雄二は動じる事無く明久に言った

「よし明久、Dクラスに宣戦布告して来てくれ」

「でもさ、下位勢力の宣戦布告の使者って、大抵酷い目に遭うよね・・・？」

「大丈夫だ、騙されたと思って行って来い」

「あやしいなあ・・・分かったよ、それじゃあ行ってくる」

「がんばってね？明久お兄ちゃん」

明久は勇希に手を振りながら教室を後にした

「お兄ちゃん、明久お兄ちゃん大丈夫かな・・・？」

「心配せんでも明久は結構頑丈じゃからな、心配せんでも大丈夫じゃ」

「んっ・・・うん」

秀吉は安心するように言い聞かせ頭を撫でた

ガラッ！と大きい音を鳴らしながら明久が駆け込んできた。

「騙されたっ！完璧に騙されたっ！」

そこにはDクラスに捕まってボコボコにされた明久がいた。

「やはりそう来たか・・・」

「知ってたんだな！？知つてて騙したんだな！？」

「それぐらい予測できないと代表なんて勤まるわけないだろ」

「少しは悪びれるよ！？」

そこに勇希が駆け寄ってきた。

「明久お兄ちゃん大丈夫・・・？痛くない？」

「大丈夫だよ！これくらい何ともないよ！」

明久がこれでもかと言うくらい体を動かしていると横から美波が「まだウチが殴る余裕はあるんだ・・・」と何処か安心したような声が聞こえた瞬間に明久は「痛い！体中が痛い！死にそう！」と転げまわった。

「明久お兄ちゃん大丈夫！？」

横で勇希が半泣きで言っている。

ちなみにムツツリーニはずっと勇希の写真を撮っている。

「まったく忙しい奴じゃな・・・」

「そんなことより屋上でミーティングするぞ？」

そして主要メンバーが屋上に集まった

「で、明久、皆に時間は伝えたのか？」

「うん、今日の午後からって伝えといた。だから先にお昼ご飯食べよう」

しかし、明久は弁当を出す気配がない、不思議に思った瑞希が明久に尋ねた。

「あれ？吉井君はお昼食べないんですか？」

「うん？一応食べてるよ？」

「塩と水は食べるとは言わんのじゃがな・・・」

「失礼な！ちゃんと砂糖も食べてるよ！」

「明久お兄ちゃん僕のお弁当一緒に食べる？」

「ありがと！後で一緒に食べよう！」

明久は目を輝かせていた。勇希の隣では秀吉が呆れたような目をしていた。

それを見ていた瑞希は何かを決心したのか一回頷くような仕草をすると明久に話しかけた。

「あ、あの！吉井君がもし良ければ私がお弁当作ってきましようか？」

「え？本当にいいの！？」

「よかったね、明久お兄ちゃん」

「うん！ありがとう勇希」

すると横から面白くなさそうに瑞希に言った。

「ふーん・・・瑞希はずいぶん優しいんだね、明久にだけ作ってくるなんて」

「あつ！良かったら皆さんの分も作ってきましようか？」

「ん？いいのか？俺達の間も作ってもらって？」

「はい、良ければ作ってきますよ？」

「本当に？やったー！」

「うむ、断る理由はないのっ」

「・・・」

「と、言うわだがお願いしていいか？」

「はい！それじゃあ、明日のお昼に作って持ってきますね！」

「さて、雑談は終わりにして本題にいくか」

「そうだね」

「雄二よ、気になっておつたのじゃが、何故EクラスではなくDクラスなんじゃ？普通じゃとEクラスに攻め入るのがセオリーじゃと思っくんじゃが・・・」

秀吉が雄二に疑問に思っていた事を聞いた、回りもそれが気になっていたのか、自然と雄二に視線が集まった。

「簡単な事だ、こつちの戦力があればEクラスに勝つのは堅い。Dクラス相手ならEクラス程ではないが勝つ見込みはある、それに景気付けにもいいだろう？それとDクラスにはAクラスに勝つための要素がある」

「ふむ・・・つまりは、これが最初のステップなんじゃな？」

「ああ、その通りだ。いいか？ここに居るメンバーは最強だ！お前達が俺を信じてくれるなら絶対勝てる！」

その雄二の自信に満ちた表情と言葉に全員頷いた。

「ねえねえお兄ちゃん」

「ん？なんじゃ？」

「家に帰ったらアレだしてもいい？」

「なんじゃ勇希、アレを着るのか？それは楽しみじゃのう」

「えへへ」

「秀吉、アレってなに？」

「秘密じゃ、のう？勇希」

「うん！」

その言葉に明久を含む全員が首を傾げた。

ちびっこ応援団(後書き)

疲れた

これが僕の勝負服！（前書き）

今日はこれで更新終了

これが僕の勝負服！

「秀吉ー！勇希ー！学校いくわよー？」

「ちょっと待ってくれんかのう？勇希がまだ支度してるのじゃ」

「まったく・・・しょうがない子ね」

優子はそう言うと昨日の夜のことを思い出していた。

「それにしても、昨日は久しぶりにあの格好の勇希を見たわね。」

「そうじゃな・・・約2年振りかのう？」

優子と秀吉は何処か懐かしむ様な顔で上に広がる青空を眺めていた。

「お姉ちゃんー！お兄ちゃんー！お待たせー」

少しの間、二人が空を眺めていると勇気が足元に走ってきた。

「うむ、どうやらちゃんとバックに入ったようじゃな」

「それを着るって事は誰かを応援するんでしょ？ちゃんと応援するのよ？」

「うんー！」

優子に頭を撫でられながら元気良く返事を返す勇希の腕には、学園で支給された腕輪とはまた別の腕輪が輝いていた。

優子と別れ、教室に入った秀吉と勇希の前には、戦いに備えて準備しているクラスメイトの姿が映った。

「皆も気合が入っているようじゃな」

「うん・・・」

勇希はこの空気が少々怖いのか秀吉の背中に隠れていた。

「おお！秀吉に勇希か、おはよう」

雄二がいつもど通りの挨拶をしてきた。

「おはようじゃ」

「おはよー」

「秀吉に勇希君！おはよう！」

すると釣られるように明久が挨拶をし、それを見たのか他のメンバーも次々に挨拶に来た。

「皆も、おはようじゃ」

「みんなおはようー」

それぞれが挨拶を済まし、明久が勇希に尋ねた。

「勇希君、昨日言ってたアレなんだけど何なのかな？」

みんな気になっていたらしく、全員が勇希と秀吉を見つめる。

「おお！そうじゃった、そうじゃった・・・勇希、着替えに行こうかのう？」

「うん！」

秀吉に連れられて勇希が教室を後にし、教室の皆は一体何なんだろうか、と言つ気持ちで待っていた。

それから十分近く経った頃、教室のドアが開かれ、全員がそこを見た。

そして、全員の時間が止まった・・・

「なんじゃ？皆どうしたのじゃ？」

「・・・／／／」

なんとそこには、頭に鉢巻を巻き、少しサイズが大きい学ラン、更に胸にサラシを巻いた勇希がいた。しかもそれだけじゃない、なんと勇希の頭の上には、勇希がデフォルメされた召喚獣が乗っていた。ちなみに服装はおそろいの鉢巻&学ランである。

「・・・っ！っ！」

ムツツリーニは大量の鼻血を出しながら、これでもかと言っぐらいの速度でシャッターを切っていた。

その隣では明久が処理落ちを起こし・・・

「・・・・・・・・」

更にその隣では雄二が感心しており・・・

「ここまで凄いとは・・・流石勇希だ」

そして他のクラスメイトは・・・

「ムツツリーニ！その写真俺が買った！」

「ずるいぞ！俺にも勇希君の写真をくれ！」

「土屋君！私にも売ってください！」

「土屋！ウチにも売りなさい！」

「・・・・・・・・！！！！（ブン！ブン！ブン！）」

ちなみに、康太は勇希の写真を一度も売ったことが無い、自分のコレクションとして大切に保管されている。

一方、この騒ぎの原因である勇希は、秀吉の後ろで顔を真っ赤にしていた。

「よかったのう勇希？皆気に入ってくれたみたいじゃぞ？」

「うん・・・／＼／」

勇希は安心したのか嬉しそうに笑い、秀吉は優しく、そして何処かホッとしたような顔をしていた。

これが僕の勝負服！（後書き）

なんとか間に合った・・・

目指せ一日一話更新

僕の親友(前書き)

やるぜ

僕の親友

2年F組は先程の騒ぎが嘘の様に静かになっていた。

そして皆の視線はある一箇所に集中していた。

「ねえ勇希君？頭の上に居るのは、勇気君の召喚獣かな？」

「召喚獣じゃないよ？明久お兄ちゃん」

「じゃあなに？」

「僕の親友です！」

そう、先の騒ぎでは皆、大して気にしていなかったが、よくよく見ればおかしい事に気が付いた。

「人間が召喚獣に触れることが出来る・・・勇希、お前の腕輪は何か特殊なのか？」

雄二がそう言うと周りの皆も「うんうん」と首を振った。

「これに付いてはワシが説明するが、それで良いかのう？」

「うん、別に構わないよ」

肝心の勇希は、召喚獣と遊んで話を聞いていないため秀吉が代わりに説明した。

「ワシも姉上と一緒に、勇希に聞いたことがあるのじゃ、当時は腕輪の事なぞ知れなかったかのう、「その機械は何だ？」と聞いたのじゃ」

「ふむ・・・それで？」

「勇希は「仲良くなった魔女のおばさんからもらった！」なぞと言い出してな」

そう言うと、秀吉は微笑みながら横で遊んでいる勇希の頭を撫でた。召喚獣も撫でてくれと来たので召喚獣の頭も撫でた。

「ははは、勇希君らしい理由だね」

「そうだな」

「じゃろ？」

そう言うとクラスの皆も笑つい、勇希は頭に？を浮かべていた。

もう五分もしない内に召喚戦争が始まる・・・はずなのだが、Fクラスは今それどころのじゃなかった。

「お兄ちゃん！みんなー！がんばってくださいーい！／／／」

やはり少々恥ずかしいのか、ほんのり頬を赤く染め一生懸命、大きくFと書かれた扇子を使い、召喚獣と共に皆を応援していた。

「……………！！！」

ムツツリーニは鼻血を出しすぎ顔を蒼白に変えながらシャッターを切り続けていた。

「やはり、あの姿の勇希はかわいいのう」

「こんなかわいい応援団に応援されたら、負けられないね！」

「この姿を目に焼き付ける……………！」

などなどクラスのやる気はガンガン上がっていった。

召喚戦争は終わった。多少苦戦した場面はあったものの圧勝だった。

秀吉や明久率いる部隊の鬼の如き活躍で一気に教室へ押し込み、最後は瑞希の圧倒的な点数でDクラスの代表が討ち取られた。

秀吉達が教室に帰ってくるなり、勇希は秀吉に抱きついた。

「お兄ちゃんやったね！」

「なに、勇希の応援があればこれ位楽勝じゃよ」

秀吉がそう言いながら勇希の頭を撫でていると周りからも賛同の聲が上がっていた。

「勇希君の応援があれば百人力だぜ！」

「むしろ百人じゃ足りない！」

などなど様々なことを言われ、勇希は嬉しかったのか表情を緩ませながら更に強く秀吉に抱きついた。

「よかったのう勇希、皆勇希に感謝しとるぞ？」

秀吉はからかう様に笑いながら勇希に言った。

「うん・・・／＼／」

こうして対Dクラス戦は幕を閉じたのである。

余談ではあるがFクラスとの召喚戦争を経験した人はこう語る。

「あれはFクラスなんかじゃない・・・もっと恐ろしい何かだっ・・・」

「！」

僕の親友（後書き）

戦闘描写なんてない、ないったらない

好奇心は僕を殺した(前書き)

お弁当の話を忘れてた

好奇心は僕を殺した

「あ、あのっ！この前約束したお弁当作ってききましたので、みんなで食べませんか？」

瑞希は結構な大きさの重箱を持ちながら明久達に言った

「え！？本当に作ってきてくれたの！？」

「は、はい！みなさんがよろしければ・・・」

「じゃあ、みんな屋上に集合ね」

「・・・（コク、コク）」

「そうじゃな、行くぞ？勇希」

「はい」

「じゃあ俺はジュース買ってくるから先に行つててくれ」

雄二を除いたメンバーは屋上へ行き瑞希お手製の弁当を囲んでいた。

「どうぞー！召し上がってください」

瑞希が蓋を開けるとそこには鮮やかな料理達が並んでいた。

「・・・」

「ほお、これはなかなか・・・」

「姫路さんって料理得意なんだね」

「すごいわね」

みんなそれぞれの感想を口にしていた。

「これ食べてもいいの？」

「もちろんいいですよ？はい、お箸です」

「やったー！いただきまーす」

勇希は嬉しそうに瑞希から箸を受け取ると卵焼きを取り口に含んだ。

「・・・」

みんなが勇希の感想を待つ中、本人は料理を口に含んだまま動かない、おかしいと思った秀吉は、どうしたのか尋ねた。

「どうしたのじゃ？勇希？」

すると勇希からゴクツと料理を飲み込む音が聞こえた、すると勇希の体がプルプルと震えだしドサツという音と共に倒れた。

「ゆ、勇希！？どうしたのじゃ！？」

秀吉は慌てて勇希に駆け寄りどうしたのか聞くと勇希は今にも死に

そんな声で秀吉に訴えた。

「お兄ちゃん……は、吐きそう……」

これを聞いた秀吉を始めとする明久、康太、美波はまさか……という考えが浮かんだ。

そして覚悟を決めたのか康太がおもむろに卵焼きを口に運んだ、そして倒れた。

みんなで話し合った結果、料理が得意らしい明久に瑞希と何故か美波が料理を教えてもらう事となった。

余談だが、この後遅れてきた雄二も犠牲になり、勇希はずっと秀吉の膝枕で休んでいた。

弁当騒ぎも終わり、今は雄二が前に出て次の召喚戦争の作戦会議を行っていた。

ちなみに勇希はまだダウンしており、秀吉の膝で休んでいた。

「俺達の次の相手はBクラスだ、いいか？ここでBクラスに勝てばAクラスとの戦争で役に立つ、絶対に負けられないぞ？」

雄二がそう言うのと教室中から自身に満ちた返事が返ってきた。

「大丈夫！大丈夫！」

「俺達には勇希君や姫路さん達がいるんだぜ？」

「負けはないね！」

「ああ、そうだといいいんだが、なんと言つてもBクラスの代表はあの「根本 恭二」だ、何をしてくるか分からんからな・・・皆注意しておいてくれ、明久！早速だがBクラスに宣戦布告してこい、これはお前にしか出来ない任務だ、いいな？」

「確か前もそう言つて僕を騙したよね・・・？まあいいよ、それじやあ行つてくる」

雄二は明久が教室から出るのを確認し、問題は無いか教室を見渡せば秀吉の表情が軽く曇っていた。

「根元恭二か・・・何もしてこなければよいが・・・」

秀吉は自分の膝で休んでいる勇希を心配そうに見つめながら言う、それを聞いた明久や康太に美波は同じく心配した表情になるが、それを見た雄二は元気付けるように言った。

「大丈夫だろ、あいつが絡んできたのは去年だし、流石にもうちよつかいは出してこないだろ」

雄二のその言葉を聞き秀吉は「そうじゃな・・・」と返した。

その日は明日の召喚戦争に備えて皆すぐに下校した。

好奇心は僕を殺した(後書き)

話がややこしくなってきた

僕の宝物（前書き）

先に謝っておきます、根元ファンの人達すみません。

私の小説では根元はかなり酷い扱いを受けます。

ギャグなしの悪者系になります。

本当にすいません

後Bクラス戦は二日掛けません、一日で終わらせます

僕の宝物

対Bクラス召喚戦争当日の朝、木下家はいつもより多少早い時間から活動していた。

「お兄ちゃん……」

「んむ？どうしたのじゃ勇希？」

「僕の服……昨日、学校に忘れちゃった」

「勇希は完璧にダウンしておったからのう……そんなに心配せんでも大丈夫じゃよ」

「うん……」

「姉上、行ってくるのじゃ」

「お姉ちゃん、いってきまーす」

「気をつけていくのよ」

秀吉と勇希はいつもより早い時間に家を出た、勇希が早く行くこと言ったからである。

そして教室に着くと教室が滅茶苦茶に荒らされていた。

「やはり根元の奴かのう・・・勇希、ワシは修理用の工具を借りてくるから此処で待っていてくれんかのう？」

「うん」

勇希は秀吉が教室を出るのを確認すると、急いで自分の学ランの入ったバックを探したが、どれだけ探しても見つからなかった。

「ない・・・どうしよう・・・？」

勇希は自分の席の所に封筒が落ちている事に気がついた、その封を開けたら中に手紙が入っていた。そして手紙に書かれた文を見た。

「・・・・・・・・！？」

勇希はその手紙を読み、理解した瞬間、全力で駆け出した。

手紙に書かれていたのはほんの少しの、凄くシンプルで分かりやすい文だった。

「木下勇希、お前の大事なものを返して欲しいなら校舎裏まで来い」

この文だけで嫌なほど理解できた、だから勇希は走っていた

「はぁ・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・」

「おおよつやく来たか、糞チビ」

「!？」

そこには2年D組の代表根元恭二と三人の男子がいた。

「……」

「なあ、お前はこれを返して欲しいんだろう？」

根元がそう言い勇希の学ランを出し、それと同時に三人いた男子の内二人が勇希の後ろに来た。

「!？」

「ほらどうしたんだ？足が震えてるぞ？ははははは！」

根元が笑つと釣られるように三人の男子も笑った。

「ぼ、僕の服……返して……！」

勇希がそう言つと根元は不快な笑い声を上げながら言った。

「ははは！足震わせなが言つても全然何も感じねえぞ？糞チビ、まあ俺の言うことをちゃんと聞けば返してやらなくもないな……」

「？」

「どうだ？聞くか？」

「……」

勇希は頷き、根元は満足そうに笑っていた。

根元の要求を聞かされ、勇希は絶句していた。

内容は、1、自分は何もせず内側から妨害する2、Fクラスの状況を根元が渡す携帯で教える

この二つだった、これを守れば召喚戦争が終わった後に返してやると言うのだ。

「……」

「どうする？俺に従うか？まあ従わないなら糞チビ、お前の大切なものが壊れるだけだけどな、ははは！」

根元はそう言うと勇希の学ランにナイフを当てた。

「っ！？か、返し……っ！？」

思わず飛び掛った勇希だがドシッ！という音と共に地面に叩きつけられた。

もともと勇希は体が小さい、しかも後ろにそれなりの体型をした男子がいては、手も足もでない。

「さあ・・・どうする?」

「うう・・・」

「ほら?早く返事しないと破いちまうぞ?」

根元はニヤニヤしながら勇希の状況を見て笑っている、勇希は最後の抵抗とばかりに顔を上げて言い放った。

「ぜ、絶対言うことなんて聞かないもんっ!」

目に涙を溜めながらそれを言い放つ、そしてそれを聞いた根元は大笑いしながら勇希に言った。

「はははは!おい糞チビ!お前も中々言うようになったじゃねえか!ならお望みどおりお前のコレ・・・ぶち壊してやる!」

勇希は見ている事しかできなかった、ただ涙を流しながらそれを見ていた

目の前に破り捨てられた学ランの上下、勇希はそれをずっと見つめていた、根元はそんな勇希を見て笑っていると、もう一人新しい男子生徒が走ってきた。

「おい根元！脅してきたぜ」

「おおそうか、よくやったな、で？どうだった？姫路の奴は？」

「手紙見せたらすぐに言うこと聞きやがったよ！ははははは！」

そして根元はその男子から手紙を受け取ると、しばらく勇希を眺め、何を思いついたのか勇希に言い放った。

「おい糞チビ！とつととそのゴミもってクラスに帰りやがれ、ああそうだついでにコレも渡しておくぜ」

破かれた学ランの上に一通の手紙が落とされた。

「……………」

「そいつはな、姫路を脅す為に使った手紙だ、姫路はどう思うだろうな？お前が此処までされて哀れみで自分の手紙を返してもらったなんて知ったら……ははははははは！」

根元達は大きな笑い声を上げて帰っていった

そこに残ったのは破かれた学ランと瑞希の手紙と涙で顔を滅茶苦茶にし、更に泥だらけの勇希だけだった……

僕の宝物（後書き）

凄く・・・暗いです

木下姉弟の本気(前書き)

さあ、木下無双が始まるよ！

木下姉弟の本気

秀吉は一人教室で卓袱台の足の修理をしていた

「まったく・・・勇希は何処に行ったのかのう？一人は寂しいのじや・・・」

愚痴を言いながら修理していると教室のドアの開く音がした。

「勇希、今まで何処に行っていたのじゃ？心配したんじゃぞっ!？」
言い切る前に勇希が飛びついて来た

「なんじゃ勇希？なにかあった・・・っ!？」

秀吉は勇希の姿を見た途端言葉を失った、服は泥だらけ、顔は涙で滅茶苦茶だった。

「ど、どうしたんじゃ勇希!？何があったのじゃ!？」

秀吉がそう言うと、勇希は今にも泣きそうな声で答えた

「お、お兄ちゃん・・・みんなに貰った服が・・・!・・・っ!ふえ・・・!」

今までずっと泣くのを我慢していたのか勇希は秀吉に抱きつきながら大泣きした、しかし秀吉は今勇希の言っていた言葉が引つかかった

「みんなに貰った服・・・？ま、まさか!？」

秀吉はもう一度勇希の体を良く見ると黒い服を握り締めていたのだ、
秀吉はまさか・・・と思いその服を勇希の手から取り広げた

「な・・・なんと言う事を・・・！」

秀吉の前にはビリビリに破かれた勇希の学ランがあった、そしてそれを
を見た瞬間秀吉の中で何かが切れた。

しばらく勇希を泣き止まさせていると瑞希や雄二、明久や康太など
いつものメンバーが教室に入ってきた。

「秀吉に勇希君おはよ・・・っ!？」

明久が言葉を詰まらせ何事かと全員教室を覗いたらなんと勇希が泣
いていてそれを秀吉が泣き止ませているのだ、みんな動揺して何も
言えなかったが、一番早く正気に戻った雄二が秀吉に何が起きたの
か聞いた。

「秀吉、一体何があつたんだ？」

「勇希が泣き止むまで待つてはくれんか？大概の事情はその学ラン
を見れば分かるじゃろ？」

雄二達は言われた通り学ランを見たが、全員言葉をなくした

「?・・・な!？」

「どうしたの？雄二・・・!？」

「酷い……！」

「……！！？」

「一体誰がこんな……」

「それをこれから勇希に聞くんじゃないよ」

それから数分後、他の人達も結構集まってきた頃に勇希は泣き止んだ
「のう勇希、一体誰にやられたんじゃない？」

「……」

「黙っていたら分からんじやろう？怒らんから素直に言うのじゃ」

秀吉は優しい口調で勇希に言った、すると勇希は重い口を開けた

「Bクラスの……代表さん」

「やはりあやつか……」

事情を知っている人間はやっぱりか……と言う顔をしていた

「で？根元になんと言われたのじゃ？」

「俺の言うこと聞けって……じゃないと僕の大切なもの壊すって・

……」

そこから勇希は皆に全部話した、言うことを聞かなかったことも、目の前で大事な学ランを破かれたことも、そして瑞希も脅されて自分で脅すのに使った手紙を渡した事も、全部話した

ちなみに、話を聞いていた瑞希は涙を流し明久に支えられていた

「そうか・・・良く頑張ったのう」

秀吉は悲しそうな表情で勇希の頭を撫でた、すると溜まっていた物が抜けたのか、又は泣き疲れたのか、そのまま眠ってしまった。

「うむ・・・少し勇希を見ててもらっても構わんかのう？」

「別に構わないよ？どうしたの？」

明久は秀吉にどうしたのかを聞いたが秀吉は何も答えず教室を後にした。

校舎のはずれで秀吉は優子と連絡を取っていた。

「姉上？秀吉じゃ」

「秀吉?どうしたのよ」

「……すまん姉上、勇希がやられたのじゃ」

「やられた……?でも誰に?」

「姉上、今ワシらはBクラスと召喚戦争しようとしておるのは知ってるかのう?」

「ええ、多少は情報が入ってきてるけど……!?もしかして根元恭二じゃないでしょうね?」

「そのとうりじゃ……」

「秀吉!なんでちゃんと見てなかったのよ!」

「すまん……」

「……まあいいわ、で?勇希は今どうしてるの?」

「多分泣き疲れたんじゃないだろうな……教室で寝ておる」

「そう……なら、もうやることはわかってるはずよ?私達はCクラスを止めるから、あんた達はBクラスを徹底的に潰しなさい」

「うむ……わかっておるよ、しかし何故Cクラスなんじゃ?」

「根元恭二の彼女はCクラス代表の小山友香よ?絶対に何かしら仕組んでくるわ、私達はそれを止める、だからあんた達はBクラス

に全力を注ぎなさい・・・いいわね？」

「うむ・・・ならばそのことをクラスに伝えるかのう」

「そうしなさい、後秀吉？アンタ本気で行きなさいよ？」

「任せるのじゃ姉上、ワシは今回ばかりは許すつもりも手加減するつもりもないからのう・・・」

「それでいいのよ、木下家の力見せてあげなさい」

「うむ・・・では切るのじゃ」

「ええ」

会話が終わるとそこには静けさしかなかった

「ワシの弟に手を出したことを後悔するのじゃ・・・根元恭二」

木下姉弟の本気（後書き）

バカテスってこんなだったけ・・・？

Fクラスの本気(前書き)

Fクラスはまじめにやったら凄いなと思うんだ

Fクラスの本気

秀吉が優子と話し終えた頃、Fクラスでは緊急ミーティングが行われていた。

「なあみんな、今回の事どう思う?」

雄二がみんなに尋ねると次々と返事が返ってきた。

「よりもよって勇希君と姫路さんに手を出すとは!」

「許せねえ!」

「徹底的にやっつけてやる!」

「なら全員一致で構わないな?」

雄二がそう言つと全員が頷いた

「」「」「問題ない」「」

みんながそう言つと同時に教室のドアが開かれ秀吉が帰ってきた。

「皆もやる気は十分のようじゃな」

「秀吉、今まで何をしてたんだ?」

「なに、少し姉上と喋ってただけじゃよ」

「そうか・・・よし！それじゃあ今から作戦を言っぞ！」

雄二がそう言っていると秀吉が「そうじゃった」と言っていると雄二の言葉を止めた

「なんだ？秀吉」

「うむ、姉上・・・つまりAクラスからの伝言じゃ」

「それで？Aクラスはなんとやってきたんだ？」

「Cクラスはこちらで潰すから、あなた達はBクラスを徹底的にやってくれ」と言われたのじゃよ

雄二はそうか・・・と言い余り驚かなかった、それどころか明久や康太、美波もむしろ予想できていたという様な顔をしていた。

「皆、今聞いたと通り我々の邪魔をする可能性があったCクラスはAクラスが引き受けてくれる、俺達はB
クラスに集中できるというわけだ！行けるな？姫路？康太？」

雄二が聞くと二人は力強く頷いた。

「任せてください！」

「・・・任せて」

「皆聞け！奴らは一つ大きなミスをした！俺達の戦力や士気を下げようとしたのだろうか、むしろ俺達を怒らせた！いいか？Bクラスとの召喚戦争は一日で終わらせる、いいな！？」

「「「おおー！」「」」

こうしてFクラスの士気をガンガン上げる形で対Bクラス召喚戦争が幕を開けた

もう夕日が傾きだした頃、勇希は優子の背中で目を覚ました。

「ん・・・お姉ちゃん・・・？」

「あら？ようやく起きたの？」

「まったく・・・勇希は本当に良く寝るのう」

「・・・？」

勇希はまだ寝ぼけているのか、まだ状況が分かっていないようだ
「お兄ちゃん召喚戦争は・・・？」

「うむ、もちろん見事にこちらの勝利じゃったよ、それに根元もし

「つかり懲らしめてやったしのう」

「そうね、勇希にも見せてあげたかったわよ」

二人の話を聞いていた勇希だが目が覚めてきたのか秀吉に学ランの事を尋ねた。

「ねえお兄ちゃん・・・僕の服どうなった？」

「ちゃんと持ってきてきておるぞ？ない、ワシと姉上に掛ければこんな
のすぐ修繕してみせるのじゃ！」

「・・・うん」

秀吉は何か元気付けようとしたが余り効果はなく、勇希を背負っている優子の顔も何処か悲しそうだ

「早く帰りましょうか？」

「そうじゃな」

「うん・・・」

家に向かう三人を夕日が優しく照らしていた。

その頃、学校では根元恭二が西村先生に呼び出されていた。

「一体なんでしょうか？西村先生」

「ああ来たか根元、いいか？一回しか言わないから良く聞け」

「学園長からの指示でお前は退学だ」

「！？な、なんで退学なんですか！？」

「よくそんな事が言えるな？お前は！姫路瑞希への脅迫行為！更に木下勇希に対する脅迫及び暴力行為をした！ばれていないと思ったのか？」

「そ、そんな事はしていません！」

「ほお・・・良くそんな嘘が付けるな？お前の仲間はもう捕まってるんだよ。」

「く・・・！」

「根元、お前は退学だ」

この後、あの時根元の横にいた三名と姫路瑞希を脅迫した二名、そしてリーダーの根元恭二、合計六名が退学処分となった

あるドアの前でAクラスの学年主任である「高橋 洋子」先生が居た

「失礼します……」

そう言うと高橋先生は扉を開けた

「あのゴミ共の処分は済んだかい？」

「はい、全員退学処分にいたしました、学園長」

「そうかい……」

学園長と呼ばれた女性「藤堂 カヲル」は少し悔しそうな顔をしていた。

「もう少し早く気づけたら止めれたかもしれないねえ……」

そう言うと自分の机の引き出しを開けた、中から出てきたのは、今より少し幼い笑顔の木下勇希とぎこちない笑顔を浮かべている藤堂カヲルのツーショットの入った写真立てだった。

Fクラスの本気（後書き）

伏線回収完了？

自分で書いといてなんだけど、これ本当にバカテス・・・？

クラスからの贈り物（前書き）

勇希の中学校時代の秀吉視点の語りです

クラスからの贈り物

対Bクラス召喚戦争が終わった翌日の朝、教室には秀吉と勇希を除いたいつものメンバーが揃っていた。

「皆さん聞きました？根本さん達が退学処分になったらしいですよ？」

「ざまあないな」

「当然だね」

それを聞いていた人達はみんな自業自得だと、まだ怒った様子で喋っていた

「だが奴らが退学処分になっても肝心の勇希がな……」

雄二が勇希の話題を出すと、みんな表情が曇った。

「あの学ランが本当に大切だったんですね……」

瑞希がそう言うと、明久が同意するように続いた。

「そつだね……僕もあんなに泣いてる勇希を見るのは初めてだったよ」

「相当悲しかったんだろうな……」

みんなで勇希の事を話していると、秀吉が教室に入ってきた。

「秀吉か、遅かったじゃないか・・・ん？勇希はどうしたんだ？」

雄二は、いつも秀吉の後ろに引つ付いている勇希が居ない事に気がつき、もしや・・・と思いながら聞いた。

「うむ・・・実は昨日の夜に勇希がワシのベットに入ってきてのう・・・また疲れて眠るまで泣いていたんじゃ、そのような状態で学校に行くのも苦じゃろうから、今日は欠席させたのじゃ」

「やっぱり、昨日の事を引きずってるのかな・・・」

「じゃが、そうなるもの仕方がないのじゃ・・・あの学ランは勇希が本当に大切にしていた物じゃからな・・・」

その話を聞いて瑞希は秀吉に尋ねた。

「あ、あの！もしかしてあの学ランは勇希君のお友達から貰ったものなんですか？」

「そうじゃな・・・それを話すと長くなってしまっくんじゃが・・・それでもよいか？」

「は、はい！」

瑞希は秀吉の返事を聞く嬉しそうに返事を返した。

「他にも、聞きたい者があるなら放課後、屋上に来るがよい」

秀吉はそう言つと自分の席に付いた。

そして放課後、屋上には秀吉を含め勇希を抜いた全員が揃っていた。

「全員揃ったようじゃな、さて何処から話すかのう……」

秀吉は懐かしむ表情で語り始めた。

「皆も知つての通り勇希は精神年齢と体が幼い、それは生まれ付きの障害でのう……医者が言うには、勉強を覚える分には問題ないのじゃが、主に体と精神年齢が成長しにくいそうなんじゃ、じゃから勇希は身長もワシの腹に顔をうずめられる程度しかなくてのう、精神年齢も小学校四年生くらいで止まっておる……」

「なるほど……」

話を聞いていた人達はそう言う事かと納得していた

「じゃがワシや姉上、家族は待つたくそんな事は気にならなかつたのじゃ……寧ろ愛しくてたまらんかつた、じゃが……周りはあまり良い反応はしなくてのう、小学校の間はまだ大丈夫じゃつたのじゃが、中学生になるとその幼さと体格故か……勇希は軽い苛めにあつたのじゃ、その苛めは二年生の終わり頃まで続いてのう……」

「

「勇希君も色々大変だったんですね・・・」

瑞希がそう言うところから中から同意の声が上がった。中にはもう泣いている者もいた。

「勇希のあの性格は昔からでいう、何を言われても一生懸命接しようとしていたのじゃ・・・それでもやはり辛かったのじゃろうな・・・家に帰ってきたりワシや姉上しか居なかつたらいつも抱きついて来てよく泣いておった、ワシと姉上は慰めてやる事しかできなかったのが何ともむず痒くてのう・・・よく姉上と喧嘩しておったわ、そのたびに勇希が飛んできて喧嘩をしてはならんと怒られたもんじや」

秀吉は懐かしむ様な、そして嬉しそうな表情を浮かべていた。

「勇希は昔から変わってないんだな・・・」

雄二は顔に微笑を浮かべていた

「じゃがその苛めも三年生の頃にはもう無くなってのう、苛められていた時に人見知りの癖が付いてしまったのか、ワシや姉上の後ろにずっと引っ付いておったがそれなりにクラスの者達との話す事もできるようになって来たのじゃ、そして三年最後の体育祭の時に勇希がクラスの応援団長に任命されたのじゃ、勇希が顔を真っ赤にしながら小さい声じゃったが、しつかりと頑張ると言ったのを聞いた時と来たら・・・思い出しただけで心が躍りよるのう、その時に勇希のクラスの者達が勇希のためだけに作り、渡した応援衣装・・・それがあの学ランじゃ」

「そうだったのか・・・」

明久はそりゃ大泣きするわなと思った

「最終的に勇希はクラスの者達と凄く仲良くなったのう、ワシと姉上は嬉しいんじゃないか？あいつの為だけの応援衣装」

秀吉が語り終えるとずっと黙っていた後ろのほうに居た男子が言った

「ならば、あの衣装には敵わないかも知れないけど、俺達も作ってやらないか？あいつの為だけの応援衣装」

後ろの方に居た男子が言い終わると、次々と賛成の返事が帰ってきた、それを聞いた雄二も立ち上がり秀吉に言った。

「いいアイディアじゃないか？どうだ秀吉？やってみないか？」

雄二に言われると秀吉はすぐに返事を返した。

「そつじやな・・・勇希の為に最高の応援衣装を作らんといかな
！」

それを聞くと雄二は皆の方を向いて叫んだ

「やるぞー！」

「「「おおー！」「」」

雄二の横で笑っている秀吉の頬には一筋の涙の跡があった

クラスからの贈り物（後書き）

疲れた・・・

僕はFクラスが大好きです（前書き）

今日中に卓袱台をみかん箱に変えてみせる

僕はFクラスが大好きです

昨日の夜もまた秀吉のベットに入り込んでいた勇希は秀吉の部屋で目が覚めた。

「・・・お兄ちゃん？」

勇希は部屋に秀吉がいない事を確認すると部屋を出て、リビングに向かった

勇希がリビングに着くとキッチンで秀吉が朝食を、優子がチクチクと学ランを修繕していた。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、おはよー・・・」

勇希が声を掛けると二人は勇希の方を向き返事をした

「おはようじゃ勇希、もう大丈夫そうじゃな」

「そうね、早く学校行く準備してきなさい」

秀吉と優子は嬉しそうな表情を浮かべながら言った

「うん」

勇希も二人の顔を見たら安心したのか、少し顔を明るくさせながら部屋を出た

「よかったわね」

優子は安心した表情でそう言うと、また学ランの修繕を再開した。

「そうじゃな、まだ本調子とはいかんみたいじゃが・・・これは早く完成させんといかんのを」

秀吉もそう言うと料理を再開した。

勇希と秀吉は、いつも通り学園に着くと優子と別れ、今自分達の教室の前にいた。

「どうしたんじや勇希？入らぬのか？」

「・・・」

勇希は秀吉の制服にしがみ付きながら、目線でイヤイヤと訴えたが、秀吉は「大丈夫じゃよ」と言い半場勇希を引きずりながら教室に入った

「秀吉、おはよう！勇希君は今日も来てないの？」

明久は秀吉に挨拶した後、心配そうに尋ねたが秀吉は笑いながら明久に言った

「心配せんでも、ワシの後ろに隠れておるよ」

明久を含む勇希を心配していたクラス全員が秀吉の後ろを見た。

「あう……／＼／」

そんな反応をする勇希を見たクラス全員は叫んだ。

「かわいい！やっぱり勇希君かわいい！」

「ようやく……！ようやくこのクラスの癒し系ナンバー1が帰ってきた！」

みんなが暴走している中、勇希は秀吉の後ろに隠れていた、そんな勇希を見て秀吉は言った

「みんな勇希の事をここまで心配していたんじゃない、ちゃんと心配掛けた事を謝って、ありがとうを言わんといかんろう」

「……うん」

秀吉が、良い子じゃと言うと勇希は秀吉の前に出た。

「あ、あの……」

勇希がそう言うともみんな暴走をピタッと止め勇希を見た

「うう……あの……えつと……／＼／」

勇希は必死に言おうとするが恥ずかしいのか言葉が中々出ず、見ている明久達はそれどころではなかった。

「反則だっ！反則だよ！」

「ああ・・・確かにあれは反則だ・・・」

「・・・・・・・・」

「ムツツリーニ!?」「」

ムツツリーニは鼻血が出すぎて顔面蒼白で勇希を見つめていた、それを見かねた秀吉が勇希に耳打ちをした。

「大丈夫じゃ、皆勇希の事を心配しておったのじゃぞ?」

「う、うん・・・」

それを聞いた勇希は心を落ち着かせるためか深呼吸を三回して、三秒間目を瞑り、そして口を開いた。

「あ、あの・・・心配掛けてごめんなさい!」

勇希は大きな声で言った、それを聞いた皆は最初はびっくりしていた物の、優しい笑みを浮かべていた。

「ははは、別に謝るような事じゃないよ、でも勇希君こそ大丈夫? その・・・」

明久はそう言うと、心配そうな顔で勇希に言った、後ろにいる他の人達も心配そうな顔をしている

「僕・・・?」

勇希がそう言うともみんなはうんうんと頷いていた。

「あ……うう……お、お兄ちゃん……」

勇希は恥ずかしいのか秀吉に助けを求めたが「自分で言わないとだめじゃ」と言われ頷くと皆の方を向き顔を真っ赤にさせながらもすっかりと言った

「ふ、服が破かれたのは嫌だったけど……で、でも……」

勇希はそこで言葉を詰まらせたが、皆は静かに続きを聞いていた、秀吉は後ろでそんな勇希を見ながら聞こえないように小声で「がんばるのじゃ」と応援していた。

「ぼ、僕……えっと……そ、その……」

「」「……」「」

全員、次の言葉をゴクツと喉を鳴らしながら待つ

「昨日の夜に……お、お兄ちゃんから召喚戦争のお話……き、聞いて……」

教室中が静かになる

「みんなが……心配してくれたのが嬉しかったから……」

「」「……っ！……っ！」「」

話を聞いていた皆が震えだしたが、勇希それに気づかず話し続ける。

「だ、だから！・・・僕の為に怒ってくれたり・・・心配してくれて・・・そ、その」

勇希はそこでもう一度深呼吸すると最後の一言を言った

「あ、ありがとう・・・／＼／＼」

勇希が最後の言葉を言うと秀吉が隣まで歩いてきて勇希の頭を撫でた。

「よく頑張ったのう、勇希」

「うん！」

勇希は皆に自分の気持ちを言えた事が嬉しかったのか、以前のようにな明るい笑顔で秀吉に抱きついた。そんな会話をしているとさっきまで震えていた明久達が動かなくなった

「・・・？明久お兄ちゃん？」

そんな皆を不思議に思い、そう言うとまた明久達が震え始めた

「？」

勇希が顔を傾げると同時に教室に叫び声が響き渡った

「「「ぬおーーーーー！！」」」

「ふみゅー！？」

なんとFクラス全員が我慢できなくなり欲望の波となって勇希に迫って来たのだ、気づくのが遅かったのか、勇希は何も出来ぬまま波に飲み込まれ、揉みくちやにされていた。

「なんなんだ！？なんなんだこの可愛さは！？」

「もう我慢できない！」

「勇希くん！」

「俺もお兄ちゃんと呼んでくれー！」

「は、はわ！？お、お兄ちゃんたすけっ！？あ、明久お兄ちゃん！
？そこ触っちゃ！？」

「明久！？お主勇希に何しとるのじゃー！？」

最初は秀吉も笑いながら見ていたが、勇希の悲鳴を聞き欲望の波に参加した。

授業も終わり、放課後になると秀吉は勇希に優子と先に帰っててくれと頼んだ、勇希は「どうしたの？」と聞いてきたが秀吉が「大事

な用事があるのじゃよ」と言うと素直に言う事を聞いて教室を後にした。

「さて・・・姫路、デザインの方はOKか？」

「もちろんです！」

姫路が返事を返す

「材料は？」

「バッチリよ」

「完璧じゃ」

「買い残しはないね」

美波、秀吉、明久が返事を返す

「そうか、よくやった。ならばは康太！お前の仕事だ、できるな？」

「・・・明日までには完成させてみせる」

康太は自信に満ちた返事を返した。

「でも凄いですね？思いついて二日でこんな段階まで行けるなんて瑞希が驚いたように言った。

「このクラスは優秀な人材が多いからな、本気を出したらこんなも

んだ」

雄二は誇らしく言う。

この6人は今、応援服製作会議を行っているのだ。提案された翌日からクラス全員で空いた時間をすべて使い、この段階まで持つて行き、後はムッツリーニが現物を作るだけとなった。

「勇希君、喜ぶといいですね」

「そうじゃな」

みんなで笑い、しばらく話した後、メンバーは解散した。

その頃、勇希は優子と一緒にクレープを食べていた

僕はFクラスが好きです（後書き）

オリジナルの話を書くことがどれだけ疲れるか痛感した

僕の二つ目の宝物（前書き）

オリジナルな話は難しい、でも書くのは嫌いじゃない

僕の二つ目の宝物

深夜、木下家は優子の部屋だけ、明かりが点いていた。

「……………」

優子は小声で「後少し……後少し……」と言いながら、ひたすら縫っていた

「ここをこうして……ここを縫えば……よし！終わった！」

優子は机の椅子から立ち、やり切った表情でベットに倒れこんだ。

「は……久しぶりに裁縫なんてしたから肩がこっちゃった」

そう言いながら優子の瞼はどんどん落ちて行く。

「……………あ、ラッピングしなくちゃ」

優子はギリギリの瞼が閉じる前に気づき、疲れた体を起こし最後の作業に取り掛かった。

「勇希喜ぶかな……ふふ」

勇希の喜ぶ姿を思い浮かべながら優子はラッピングを終えベットで眠った。

優子が修繕をしている中、土屋康太も順調に応援衣装を作っていた、
そしてかなりの速さで動いていた手を一度止めた。

「……出来た、後はここの刺繍だけ」

康太はそう言うともたまた作業に戻った。

康太の横にある机にあるデザインを書いた紙には、背中にFのマークが描かれていた。

いつもより早い朝、秀吉は勇希を起こしに部屋へ向かった

「勇希！もう朝じゃ、早く起きるのじゃ！」

秀吉はそう言うとも勇希の布団を剥ぎ取った。

「うん……お兄ちゃんおはよう……」

「うむ、おはようじゃ勇希、朝食ももう出来ておるぞ？今日は早めに学校へ行くのじゃから、早く支度をして降りてくるのじゃ」

秀吉はそう言うと部屋から出て行った。

「……………」

勇希はまだ眠たいのか瞼を擦りながら着替え始めた。

「お兄ちゃんおはようー」

制服に着替えた勇希がリビングに入ってくる

「朝食はテーブルに置いてあるから早く食べるのじゃ」

秀吉に言われ朝食に取り掛かるが食べる寸前にいつもはいる優子がない事に気がついた。

「ねえお兄ちゃん、お姉ちゃんは？」

「昨日は遅くまで何かしていたみたいじゃったから、まだ寝ておる」

「起こしてあげなくていいの？」

「こんな早くに起こすのも可哀想じゃからな、それに姉上は自分でも起きられるから心配いらないのじゃ」

秀吉は笑いながら勇希に言った。

やはり出た時間が早いのか、通学路は秀吉と勇希以外はランニングをしているおじさんくらいしか通らない。

「誰もいないね・・・」

「そうじゃな・・・もしかしたらお化けが出るかもしれないのう」

秀吉は笑いながらそんな事を言うと、勇希が今までは手を繋いでいただけだったのが、がちり秀吉にしがみ付いた。

「冗談じゃよ」

「ほ、ほんと・・・？」

勇希は涙目で秀吉に聞いたが、そんな顔を見せられたらもつとからかいたくなるのが秀吉だった。

「半分だけじゃがな」

からかった結果余計に勇希がしがみ付いてきた。

学園に着き、教室へ向かう。

「誰もいないね」

「そうじゃな」

そんなやり取りをしていると、勇希達は自分の教室の前に着き、ドアを開けた。

「「「おはよう！秀吉！勇希君！」」」

「！？」

勇希はかなりびっくりしたのか、一瞬で秀吉の後ろに隠れていた

「皆ちゃんと時間通りに来たようじゃな」

そこにはFクラス全員が集まっていた、凄く眠そうな顔をして

「？お兄ちゃん知ってたの？」

勇希は秀吉に聞いた

「実はじゃな、みんなで勇希に渡したい物があるのじゃ」

「僕に？」

秀吉の言葉に勇希が首を傾げる。

「ムツッリーニ！」

「・・・」

秀吉が康太を呼ぶと、綺麗にラッピングされた荷物を持って奥の方から勇希の傍に来た。目元にはでかい隈ができている。

「康太お兄ちゃん大丈夫？」

「・・・心配ない」

康太はそう言うとプレゼントを勇希の前に出した。

「？僕に？」

「・・・クラスの皆から」

勇希は康太からプレゼントを受け取って周りを見ると皆、期待した視線を送ってきていた

「開けてもいいの？」

「・・・(コク、コク)」

康太から許しを貰うと、勇希はリボンを解いて包んでいる紙を開けた。

「え・・・？」

勇希はそう言っていると、中に入っていた学ランを手にとると何も言わなくなった。

「・・・？」

「「「……」」」

何も言わない勇希を見て勇希の目の前にいるムツツリーニを含む周りにいるクラスメイトは心配そうに見つめる。すると勇希は顔を上げた。

「応援団の……服……？」

「……みんなで作った」

康太がそう言うのと勇希はもう一度手に持っている学ランに目をやった、すると勇希の横に秀吉がやって来た

「皆にワシがあのお学ランの事を教えたのじゃ」

「お兄ちゃんが？」

「うむ……そしたら皆、が「あの学ランには劣るかもしれないけど、俺達で作ってやらないか？」といいだしてのう……皆で話し合いながら作ったんじゃない」

「僕の為に……？」

「そうじゃ、皆で勇希の為に作ったんじゃない」

そう言われて勇希は周りを見渡すとみんな嬉しそうな顔をしていて、一周するとまた学ランに目を戻し手に持っている学ランを胸に抱きしめた。

「貰ってくれるか?」

秀吉が聞くと勇希は頷いた、それを見た皆は声を上げて喜んだ

「勇希、早速だが今日はAクラスとの召喚戦争だ、そいつを着て応援してくれるか?」

雄二がそう言つと勇希は「うん!」と力強く頷いた

「よし、なら勇希が着替え終わったら宣戦布告にいくぞ」

「ならば早く着替えんな」

「うん」

勇希はとても嬉しそうな表情で、新しい学ランを胸に抱きしめながら秀吉と教室を出た

秀吉と勇希は性別、秀吉専用の更衣室で着替えながら話していた

「お兄ちゃん見て見て!背中にFって書いてある!」

「これは中々のデザインじゃな」

勇希の着替えが終わると秀吉は修繕が完了した学ランを持って、新しい学ランを鏡で見ながらはしゃいでいる勇希に話しかけた

「実はじゃな勇希、ワシと姉上からも渡したい物があるのじゃ」

「お兄ちゃんとお姉ちゃんから？」

「そうじゃ、実は学ランの修繕が完了してのう」

「本当に!？」

「本当じゃよ」

秀吉はそう言って勇希に修繕の終わった学ランを渡し、勇希はラッピングされた袋の中身を出したが、中から出てきたのは修繕されてはいるがもう着る事は出来ないような状態の学ランだった

「すまんのう勇希・・・頑張っては見たんじやが、そこまでが限界だったんじや・・・」

秀吉は悔しそうな声で言うが勇希は座っている秀吉の首に抱きついた

「お兄ちゃん、ありがとう」

「・・・っ！ありがとうじゃ勇希」

勇希にそう言われちよっと目に涙が溜まりながらもしっかり答える

秀吉

「後で、姉上にも言ってあげるのじゃぞ？一番頑張ったのじゃから」

「うん！」

二人は更衣室を出て教室へ戻った。

僕の二つ目の宝物（後書き）

俺の妄想がカオスになった結果がこれだよ！

宣戦布告とソウルブリーダー（前書き）

さてやるか・・・

宣戦布告とソウルブラザー

教室で雄二達は作戦会議をしていた

「みんな聞け！Aクラスとは全面的な召喚戦争はしない」

それを聞くとクラスがざわめいた

「どっついつ事？」

明久がそう言っていると雄二が自信に満ちた表情で答えた

「Aクラス代表に一対一対決を申し込む」

雄二がそう言った途端クラスがうるさくなった

「誰がやるんだ？」

「でも確かAクラスの代表は学年主席だぞ」

雄二達が盛り上がっている時、勇希と秀吉とムッツリーニは、教室の一番端っここで話を聞いていた。

「一対一とは、雄二も大胆なことをするもんじゃ」

「・・・・・・・・」

「」

秀吉はなんとなく雄二の話聞き、ムッツリーニはカメラの整備をし、勇希はムッツリーニの持っていた写真を見ていた。

「それにしてもムッツリーニよ、お主よく女子以外の写真を持っておったな」

「……勇希用」

以前、勇希に自分の写真を見せてくれとせがまれた時に、自慢のコレクションを見せたのだが「偶然」通りかかった秀吉に見つかり写真を捨てられた事がある、それ以降勇希に見せてくれと言われた時に常備しているのだ。

「あ！お兄ちゃん見て！僕とお兄ちゃんの写真！」

「……！？」

「ワシと勇希の写真じゃと？」

ムッツリーニは凄い量の汗を流しながら秀吉の反応を待った

「……ムッツリーニ」

「……！？」

秀吉の声は低く、ムッツリーニはゆっくりと秀吉を見た

「……幾らじゃ？」

「……？」

秀吉が写真売ってくれと言う予想外な返事を聞きムツツリー二は
どんな写真か確認した

「……この写真は秀吉ならタダ」

「なんじゃと!？」

秀吉の手にある写真は秀吉の膝の上に勇希が座り楽しそうに二人で
喋っている写真だった

「いつもは勇希の写真は誰にも渡さない、でも家族は別……ちな
みに他にもある」

「こ、これ以外もあるじゃと……? 見せてはもらえんじやろうか
?」

「別に構わない、明日もってくるから気に入ったのがあれば言えば
いい、焼いてくる」

この瞬間、秀吉とムツツリー二の間には誰にも知られない深い友情
が芽生えた

そうこうしている内に作戦会議は終わり、Aクラスに宣戦布告する
事となった。

「お姉ちゃんーん！」

「えっ？ゆ、勇希！？」

勇希は雄二がAクラスの扉を開けた瞬間に秀吉達が止めるまもなく優子の下に駆け寄り抱きついてた。

「ゆ、勇希！？ここは学校よ！？」

優子はなんとか離れるように言い聞かせようとすが言つ事を聞かず、優子の周りにいるクラスメイトは笑っていた、それを見て優子は諦めたのか、勇希にどうしたのか聞いた

「勇希？いきなり飛びついてきて一体どうしたのよ？」

すると勇希は抱きついたまま上を向き答えた

「お姉ちゃん、僕の服直してくれてありがとう」

優子はすぐに理解して嬉しそうに笑いながら勇希の頭を撫でた

「ふふ・・・どういたしまして、あら？勇希それ新しい学ランじゃない、どうしたの？」

「クラスのみんなが作ってくれたの！」

「そうなの？よかったわね」

「うん！」

優子達がそうしていると、雄二達が非常に気まずそうに優子に喋りかけた。

「あー・・・お取り込み中悪いんだが、ここにAクラス代表はいないか？」

「悪いと思うなら話しかけないでしょだい、で？あなた誰よ？」

「俺はFクラス代表の坂本雄二だ」

「あら？私の弟達のクラスの代表じゃない、弟達をよろしくね？」

「それは当たり前だ、さて、本題なんだが此処の代表はいないか？」

「今代表は用事で席を開けているわ、伝言なら私が預かるけど」

「なら頼もつか、俺達はAクラスに召喚戦争として！Aクラス代表に一騎打ちを申し込む！」

それを聞いた優子は勇希に秀吉の所に行くように言い、真剣な目で雄二を見た。

「あなた正気？Fクラスのあなた達が勝てるわけないじゃない」

「勝てるかどうかを聞いているんじゃない、やるかどうか聞いているんだ」

雄二がそう言うと優子は考えた

「そうね、受けてもいいけどやるなら五対五よ」

「何故だ？」

「保険よ、もし代表が体調不良で姫路さんが絶好調だったら、問題次第では方が一ってことがあるかもしれないし」

「それは安心しろ、こっちからは俺が出る」

「それを信じると？」

「・・・わかったよ、そっちの条件を飲む」

「そう、よかったわ」

そう言うと優子は勇希の方へ行こうとしたが、雄二が止めた。

「ただ！こっちからも一っだけ条件がある」

「・・・条件はなに？」

優子は少しイラッとしたのかちょっと表情が怖い

「教科の選択権はこちらに全部渡して欲しい、それくらいのハンデはいいだろ？」

「全教科か・・・」

「その条件受けてもいい」

優子が考えているとAクラス代表の「霧島翔子」が優子の後ろに現れた。

「やっぱり居たのか、翔子」

雄二は、最初から居た事が分かっていたらしく驚いて居なかった

「・・・その条件、受けてもいい」

「代表いいんですか？」

「・・・ただし、こっちも条件を一つ増やす」

「いいだろう、言ってみろ」

雄二がそう言うと、翔子はしばらく間を置いた後、口を開いた

「・・・負けた方が勝った方の言う事を何でも聞く」

雄二は予想していたのか大して反応せずただ一言だけ返した

「いいだろう、その条件を飲む」

宣戦布告も終わり、雄二達是对決の準備のため帰り、Aクラスに残ったFクラスのメンバーは、勇希、秀吉、ムッツリーニの三人だけ

だった、そして交渉が終わると勇希は、優子の元へと駆け寄りまた抱きつき、優子に心配そうな表情で言った。

「お姉ちゃん大丈夫・・・？」

「なにが？」

優子が聞くと勇希は言いにくそうに言った。

「さっきのお姉ちゃん・・・なんだかいつもと違って怖かったから・・・」

勇希が、そう言っていると優子は微笑みながら頭を撫でた

「さっきは真剣な話だったのよ・・・今は怖くないでしょ？」

優子がそう言っていると勇希は安心したのかいつも通りの笑顔になった。

しばらく優子と勇希が話していると、秀吉とムツリーニがやって来た

「秀吉、なにやってたのよ？それと隣の人は？」

「姉上、さっきメールで話したムツリーニじゃ・・・」

「なんですって・・・？」

「……はしめまして」

その後三人はすっかり意気投合していた。

ちなみ、に勇希はお菓子を食べるのに夢中だった。

勇希の日常的な話で盛り上がっていた三人だが時間が時間なためお開きにする事にした。

「なかなか面白い話だったわ、ムッツリーニ君」

「そうじゃな、今度は時間のあるときに話したいもんじゃ」

「……それはありがたい」

結局この三人は勇希繋がりでソウルブラザーになっていた

「それじゃ勇希、秀吉、ムッツリーニ君、会場で会いましょう」

「姉上が相手でも手加減はせんのだじゃ」

「……望むところ」

「お姉ちゃんががんばってね？」

優子と別れた三人は一旦、教室に戻り会場に向かった

宣戦布告とソウルブラザー（後書き）

間に合うか？間に合わせてみせる！

アニメでは優子のBL好きがばれた、私の小説では優子のブラコンがばれた

蛇と僕とダンボール（前書き）

先に言っとく・・・ゴメンナサイ

蛇と僕とダンボール

試験会場では勇希以外のメンバーは全員揃っていた。

「勇希は一体何をするきなんじゃろうな」

「」「さあ？」「」

今より十分ぐらい前に秀吉は勇希に「ちゃんと応援するからみててね！」と言われてからずっと気になっていた。

「一体何処で・・・む、もう試合が始まるのう」

秀吉はどういう勇希がどういう応援をするのかドキドキしながら会場に上がった。

そのころ、勇希は会場全体が見渡せる体育館の二階でダンボールを被っていた。

「うわぁ・・・本当に誰にもばれない・・・蛇のおじさんが言った事って本当だったんだ！」

勇希が最近やったゲームに出てきたキャラクターの言っていた事が事実だった事に感動していると試合が始まる合図が体育館で響き渡った。

「はじまった・・・」

そしてステージの上ではA、Fからの代表五人が揃っていた

「それでは、第一試合、出場者は前に」

「私が行きます」

「姉上が出るのか、ならばワシが行くのだじゃ」

優子と秀吉がステージに上がると勇希がいないことに気づく

「あら？勇希は？」

「ワシも分からんのだじゃ」

肝心の勇希は二階でパニックになっていた

「一回戦からお姉ちゃんとお兄ちゃんが出るなんて聞いてないよ！？」

慌てながらアンプにマイクのコードを挿す

『いたた・・・うゝマイクの線が足に・・・』

「ちよつと秀吉！？なんでスピーカーから勇希の声が聞こえるのよ！？」

「ワ、ワシにそんな事言われても分からないのじゃ！」

ステージ上で慌てている二人、だがそんなのお構いなしに勇希の応援は続く

『これ聞こえてるのかな？お姉ちゃん！お兄ちゃん！』

勇希はそうマイク越しに言つと丁度ステージの正面にある二階の手すりの所にひよっこり現れ、手を振っていた。

「勇希！？そんなところでなにしてるのよ！？」

『え？何って・・・お姉ちゃんと兄ちゃんの応援だよ？』

「勇希の言っていたのはこれの事じゃったのか・・・」

秀吉は自分が気づかなかつた事に軽く後悔した

『お兄ちゃん！お姉ちゃん！がんばって・・・！？』

「？何かあつたのかしら？」

秀吉も分からないと言おうとしたところにスピーカーから大音量の怒鳴り声が響いた

『こんなところで何をやっとするかー!?!?』

『ふえ!?!?せ、先生!?!?』

『勇希よ・・・先生はひじょくに悲しいぞ?お前は他の奴等と違っていい生徒だと思っていたのに・・・』

「・・・」

優子と秀吉はもう言葉がでなかった

『先生待つて!まだお姉ちゃんとお兄ちゃんの試合が・・・!?!?』

『安心しろ勇希、お前にもちゃんと試合会場を用意してある、先生と二人っきりの補修だ!』

『お姉ちゃんーーーーん!!お兄ちゃんーーーーん!!!!頑張つて・・・』

勇希の最後の言葉はマイクのジャックが抜けたよう最後まで二人の耳に届かなかった

「なんだつたの・・・?今の・・・?」

「ワシにも分からん・・・」

そしてこの騒動で勇希はこの学校で明久達並に有名になった。

そして鉄人に連れ出された勇希は補修を受けていた。

「あう……わかんない……」

「何処が分からないんだ？ああここはだな……」

案外真剣に補修を受ける勇希だった

そして補修が終わり、勇希は鉄人に何故あんな事をしたのか説明させられていた

「まったく、お前は何故あんな事をしたんだ？」

「それは……お姉ちゃんとお兄ちゃんを応援したかったから……」

それを聞いた鉄人は呆れたようなため息を出した

「まったく……、限度と言うものがあるだろう？」

「えへへ……／＼／＼」

「寝めとらん！まったく・・・それにお前はどつやってあそこに忍び込んだんだ？」

「ダンボールです！」

「なんだと・・・？」

鉄人はダンボールと言う言葉が出た途端目つきを変えた

「蛇のおじさんが言ってたんです！ダンボールは潜入任務の必需品だって！嘘じゃなかったんです！」

「ほう・・・お前はダンボールの良さが分かっているじゃないか、いいか？ダンボールと言うものは・・・」

勇希と鉄人のダンボールの会話はAクラス対Fクラスの試合が終わるまで続いた。

そして補修時間が終わり自然とダンボールの会話も終わりを告げた。

「先生、僕先生のこと誤解してました！」

「そうか・・・、先生もお前の事を誤解していたよ」

「それじゃあ先生！また時間があつたらダンボールの事教えてくださいー！」

「ああ、もちろんだ」

鉄人の返事を聞くと勇希は教室え向かう、その後姿を見て鉄人は少し考え、勇希を呼び止めた

「勇希！」

「？」

勇希は鉄人を見る

「・・・」

「？どうしたんですか？」

そして鉄人は誰にも話していない、話す事のない秘密を勇希に話した

「お前に俺の秘密を教えてやる、俺は昔、周りからこつ呼ばれていた」

「」

「!？」

本当に近くでしか聞こえないような小さな声、だが勇希の耳にはしっかりと聞こえていた

「本当に・・・蛇の・・・おじさん？」

勇希がそう言ったときにはもうすでに鉄人は背中を向けて歩いていた

「次回の授業までにしっかりと補修内容を覚えて置くように！」

鉄人はそういいながらこちらを見ずに手を振っていた

「・・・はい！」

勇希は大きな声で返事をする自分の教室へ走って行き、背中から覗く鉄人の口は優しく笑っていた

鉄人と別れ、教室に帰ってきた勇希は秀吉に駆け寄り抱きついた。

「お兄ちゃん！」

「おお勇希、補修はもう終わったのじゃな」

「うん！」

勇希は秀吉に頭を撫でられながら返事をする、補修の間ずっと気になっていた事を聞いた

「ねえねえお兄ちゃん、召喚戦争どうなったの？」

勇希がそう聞くと、秀吉は笑いながらいった

「雄二が最後の最後で負けてしまっただけ、机が卓袱台じゃったのがみかん箱になってしもうた」

「残念だったね」

勇希がそう言うと、秀吉は「そうじゃな」と言いながら勇希の頭を撫でた

勇希が補修から帰ってきてしばらく経った頃、教室のドアが開かれた

「お前達！席につけ！」

「て、鉄人！？」

明久が驚いたように言うと、それに続くように驚きの声が次々に上がった

「静かにしろ！いいか？お前達が召喚戦争で負けた事で、今日から私がこのクラスの担任だ、これから一年、死に物狂いで勉強させてやる」

鉄人がそう言うと、クラス中から絶望の悲鳴が上がったが、勇希だけが何処か嬉しそうな顔をしていた

蛇と僕とダンボール（後書き）

間に合わなかった、そしてどうしてこうなった

PS、時間に間に合わなかったので自分への罰に、「とある弟の性
活」書いてきました、ぐへへ

僕とチャイナと清京祭（前書き）

鉄人が担任になった時のシーンはこの話の一話前に書いてあります

僕とチャイナと清京祭

Aクラスとの召喚戦争が終わりしばらく時が過ぎた頃、Fクラスでは一年で一番最初の学校行事「清京祭」について話し合いが行われていた。

「清京祭楽しみですね」

「そうじゃな、じゃが皆は余りやる気がないみたいじゃぞ？」

教室には、瑞希、美波、秀吉、勇希の四人しか残っておらず、しかも勇希は秀吉の膝で眠っており、他のクラスメイト達は外で元気に野球をしていた、すると教室のドアが開き鉄人が入ってきた。

「なんだ？お前達だけなのか？他の奴等は？」

「外で遊んでいます」

「まったくあいつらは・・・！」

鉄人はそう言うとグラウンドに走っていった。

そして全員引きずり戻され、席に付くと鉄人は呆れながら言った。

「まったくお前たちは・・・少しは真面目にやったらどうだ、稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういった気持ちすらないのか？」

鉄人のその言葉を聞くと全員が目を光らせ、話し合いが始まった

「そつだ、その手があった！」

「清京際で稼ぎを出して設備を元に戻す！」

「でも、何やるんだ？」

「俺達のクラスには、勇希君や姫路や木下が居るから客は幾らでも呼べる・・・喫茶店が妥当じゃないか？」

そして話し合いが進んで行き、Fクラスの出し物は中華喫茶に決まった。

「中華なら俺に任せてくれないか？」

「・・・俺に任せて」

須川と康太が立ち上がり、それを見た秀吉は驚いたように康太に言った

「ムッツリーニは料理が出来たのじゃな」

「・・・紳士の嗜み」

康太がそう言うのと、いつの間にか起きていた勇希が言った

「康太お兄ちゃんのご飯凄く美味しいんだよ！」

「勇希は食べた事があるのじゃな」

「・・・／／／」

実は、ムッツリーニは勇希に何度か手料理を振舞った事があった

「それじゃ、厨房は須川君とムッツリーニで大丈夫だね」

「じゃあ、私も厨房やります！」

瑞希がそう言うのと明久が慌てながらそれを阻止した

「な、何を言ってるの姫路さん！？姫路さんは可愛いんだからホルじゃないと駄目だよ！」

「そ、そうですか？明久君がそう言うのなら・・・私ホール頑張りますね！」

瑞希がそう言うのと明久と後ろにいた勇希と秀吉はホッと胸を撫で下ろした、すると美波が何か期待するような表情で明久に言った

「アキ、ウチも厨房に行こうかな・・・」

「そうだね、適任だと思っよ」

「ならば、ワシと勇希も厨房にしようかのう」

「何を言ってるんだよ!? 秀吉と勇希は可愛いんだから、ホールに決まって・・・ああ!? み、美波!? そ、その技はだ・・・アツ!

明久は鬼のような形相の美波によって沈められた

「お兄ちゃん僕達ホールするの?」

「そうじゃな、がんばるのじゃぞ?」

「うん!」

秀吉と勇希がそんな会話をしていると、復活した明久とムッツリニが話しかけてきた

「そう言う事で秀吉、勇希君! これを着てね!」

「・・・(コク、コク)」

「かわいい〜・・・」

「・・・なんで女物なんじゃ?」

なんと秀吉とムッツリニが持っていたのはチャイナドレスだった、しかも勇希用はしっかりサイズも調整されている

「何言ってるの秀吉？二人とも何処から見ても美少女じゃないか！」

「勇希は分かるがワシは男じゃ！」

秀吉と明久が言い合いをしていると、康太が勇希にいった

「……勇希と秀吉の為に作った」

「僕とお兄ちゃん？」

「……是非着て欲しい」

勇希はそう言われると嬉しそうに言った

「康太お兄ちゃんありがとう！」

「お兄ちゃん、一緒にこれ着よう？」

「うむ……まあ勇希がそう言うなら別に良いじゃろっ」

「よくやった、ムッツリーニ！」

「……(コク、コク)」

明久と康太が話していると秀吉が康太の耳元で囁いた

「……分かっておるな？ムッツリーニ」

「……任せて」

誰にも気付かれない様にそのやり取りを終わらせると秀吉は勇希を連れ、秀吉更衣室へ向かった

「ムツツリーニ、後で勇希君の写真を・・・」

「・・・勇希の写真は非売品」

「そんな～・・・」

数分後、着替え終えた秀吉と勇希が帰ってきた

「やっぱり僕の目に狂いはなかった!」

「・・・!!!!(パシャッ、パシャッ)」

「悔しい・・・でもかわいい!」

「かわいいです～・・・」

みんなの目の前には、色違いでお揃いのチャイナ服を着ている勇希と秀吉がいた

「まったく・・・勇希は別としてワシは男じゃぞ?」

「……………」

勇希は恥ずかしそうに秀吉の後ろに隠れていたが、しばらくして皆が落ち着くと、康太に話しかけた

「康太お兄ちゃん……僕似合ってる……？」

「……………似合ってる」

「本当？えへへ……ありがとう」

康太は鼻血の海に沈んだ

僕とチャイナと清京祭（後書き）

昨日初めてバカテスのアニメを見た、何故か秀吉の隣にはいつも勇希が見えた、原作読んだ事ないからキツイな・・・

後、勇希の懐き度は 秀吉>優子含む家族>ムッツリーニ>鉄人>明久含む一年生の時のクラスメイト>その他 です

作戦会議中はお静かに！（前書き）

やっと・・・やっと清京祭が書ける・・・！

作戦会議中はお静かに！

「誰が雄二なんかと！それだったら僕は断然勇希君か秀吉がいいよ！」

放課後、明久がそう言うのと偶然通りかかった勇希と秀吉が動きを止めた

「あ、明久お兄ちゃん・・・？」

「明久・・・？おまさか・・・」

「秀吉！？ち、違うんだ！今のは言葉のあやで・・・」

勇希の困ったような、そして秀吉の何処か殺気を含んだ反応を見た明久は慌てて弁解した

そんなやり取りも落ち着いていた頃、秀吉は明久に聞いた

「で、一体どうしたのじゃ？やけに真剣な顔をしておるが」

「丁度いいから木下も聞いてくれない？本人には誰にも言わないでほしいって言われてただけど、事情が事情だから相談しようと思つて・・・秘密の話だから、誰にも言わないでね？」

「わかったよ」

「うむ」

「明久お兄ちゃんのお気持ちは嬉しいけど・・・で、でも僕はお兄ちゃんとお姉ちゃんが・・・／＼／」

皆が真剣な話をしようとしてる中、勇希は秀吉の隣でまだ悩んでいた

「瑞希お姉ちゃん、転校しちゃうの!?!」

「正確には、このままだとね」

「待つんじゃ明久が処理落ちしかけてるぞ?」

「このバカ、不測の事態に弱いんだから!」

「ほれ明久?早く目を覚ますのじゃ!」

秀吉が明久を揺さぶり、明久はハッと目を覚ましたが、目に光が宿っていない

「秀吉・・・僕と勇希君が結婚したら、僕を義兄と呼んでくれる?」

「その首を今すぐへし折ってやってもよいのだぞ?」

「どっとう処理をしたら、瑞樹の転校からこういつ反応が得られるのよ?」

「明久お兄ちゃん大丈夫？」

皆、それぞれの反応をすると明久の目に光が戻り美波に詰め寄った

「美波！姫路さんが転校するってどういうこと！？」

「どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞樹は、転校しちゃうかもしれないの」

「確かに姫路は体が弱いからのう……この設備では無理もないのじゃ」

「確かにそうだね……って事は、転校は両親の仕事の都合とかじゃないって事？」

「そう言う事。だから瑞樹も対抗して「召喚大会で優勝して、Fクラスを見直してもらおう」とか考えてるみたいんだけど、やっぱり設備をどうにかしないと……だからアキには坂本を説得して欲しいのよー！」

雄二は清京祭には興味はなく、参加していなかった。明久は美波に頼まれるとしっかりと頷いた

「わかったよ、姫路さんの転校が掛かってるんだ、絶対に雄二を説得してくる、秀吉も手伝ってね？」

「うむ、任せるのじゃ」

「僕も頑張るー！」

「まずは、雄二と話さないと・・・」

「あやつは、今何処におるのじゃ？」

「どうせ、霧島さんから逃げてるんじゃないの？」

明久はそう言うのと自分のポケットから携帯を取り出し、雄二に電話を掛けた

「あ、もしもし雄二？今何処に・・・あれ？雄二どうしたの？雄二？あ、切れちゃった・・・」

「一体どうしたのじゃ？」

「どうやら本当に霧島さんに追いかけてたみたい、「やばい、見つかった！」「鞆を頼む！」だってさ」

明久が笑いながら言うのと秀吉は呆れながら言った

「ならどうするのじゃ？これでは雄二を呼び出せんぞ？」

「秀吉、僕は一年生の時から雄二の相棒やってるんだよ？」

明久は自信満々な表情で秀吉と勇希に作戦を説明した

「じゃあ秀吉、頼んだよ？」

「うむ、任せるのじゃ」

明久の作戦を聞いた数分後、作戦内容を確認し、明久は再び雄二に電話を掛けた

「あ、もしもし雄二？・・・霧島さんから逃げ切ったみたいだね、雄二と話したい人が居るから代わるね？・・・秀吉、後は任せたよ？」

秀吉は頷くと明久から携帯を受け取った

「・・・雄二、今何処？・・・なんじゃ？すぐに切りおつたぞ？」

「お兄ちゃん、凄い！」

「ははは、作戦は成功かな？じゃ僕達は教室に戻ろう。」

明久が満足げに言うと、勇希達は教室に向かった

「なるほどな・・・だが、そうなる喫茶店だけじゃ、姫路の転校を止める事はできないな」

雄二は、明久の作戦通り教室に逃げてきたところを明久達に捕まり、事情を聞いた

「どうして喫茶店だけじゃ駄目なのさ？」

「それを、今から説明してやる・・・まず問題点は二つだ、一つはこの教室の設備、畳は腐ってポロポロ、机はみかん箱で、拳句壁や窓は割れて隙間風が入り放題・・・姫路は体が弱いからな、父親はこんな環境で勉強させたくないんだろう、だが！この問題は喫茶店でまだ解決できる」

「それは分かったのじゃが、後一つはなんなのじゃ？」

「二つ目の問題点は・・・Fクラス自体だ」

「どづいつこと？」

明久が疑問の声を上げたが、雄二は構わず続けた

「Fクラスは、学園で一番バカな奴らが集まるクラスだ、評判も悪い、そんなクラスに自分の大事な娘を置いておきたいと思うか？」

「なるほど・・・でも、それは清京祭じゃあどうにもならないんじ

やないの？」

明久の言葉を聞くと雄二は呆れたように言った

「まったく・・・お前は召喚大会を忘れたのか？」

「なるほど・・・確かに召喚大会で優勝したらFクラスの株も上がるかも知れんおう」

それを聞くと雄二は満足げに頷いた

「そういうことだ、俺達は召喚大会で優勝し、ついでに喫茶店も成功させて、姫路の転校を阻止する！」

「「「「「おおー！」」」」」

雄二が宣言すると教室に居た全員が声を上げた、

「ムツツリーニ？お主いつからいたのじゃ？」

「・・・最初から居た」

作戦会議が終わった後雄二達は学園長室へ向かい、勇希と秀吉は手を繋ぎながら家に向かっていた

「ねえねえお兄ちゃん」

「なんじゃ?」

「僕は、何すればいいの?」

「そうじゃのう・・・そうじゃ!勇希は喫茶店でチラシ配りをしてくれんかのう?」

「チラシ配り?」

「うむ、演劇の練習じゃと思ってしっかりやるのじゃぞ?」

「うん!」

二人は明日の清京祭の事を楽しそうに喋りながら帰って行った

作戦会議中はお静かに！（後書き）

ネタが・・・！誰か私にネタを・・・！

営業妨害（前書き）

また間に合わなかった・・・

営業妨害

清京祭当日の朝、いつもはボロボロのFクラスは、中華喫茶に変わっていた

「うむ、なんとかかなりそうじゃ」

「秀吉と勇希君は道具を作るのがうまいんですね」

「これでも演劇部じゃからな、道具を作る事には慣れておる」

秀吉がそう言うと、チャイナドレスを着たまま机を抱えた勇希が教室に入ってきた

「お兄ちゃん、机できたよ」

「よくやったのう勇希、中々の出来じゃ」

「えへへっ・・・／＼／」

「おお、よく出来てるじゃないか！」

秀吉が勇希を褒めていると、奥から雄二が感心したように言いながらやって来た

「クロスで誤魔化してるだけじゃよ、クロスを捲るとダンボールが見えてしまいよる」

「なに、わざわざクロスを捲ってまで見る奴なんか、営業妨害以外

来やしないよ」

秀吉は「そうじゃな」と返事をした後、小物を作る作業に戻った

順調に喫茶店の準備も終わり、召喚大会に出るメンバーはもう教室を出ており、勇希はビラの詰まったダンボールを準備していた

「勇希よ、準備は出来たのかのう？」

「うん、後はこれを配るだけだよ？」

「そうか・・・では気をつけて行って来るのじゃぞ？」

「うん！」

勇希は元気に返事をした後、教室を出た

「2年F組の中華喫茶です〜！美味しいので是非きてください！」

「へ〜、君かわいいね？何処のクラス？」

「2年F組です！あ、あの・・・良かったら食べていってください

ね・・・？／／／」

勇希は順調にビラを配り、丁度今のが最後だったらしく、次の束を取りにダンボールが置いてある階段に向かった

「は、恥ずかしかった・・・／／／でもお兄ちゃんがこれも演劇の練習だつて言つてたし頑張らないと・・・えつと次の束は・・・1、2、3、4、・・・あれ？今何枚だっけ？・・・1、2、3、4、・・・」

「・・・」

勇希がビラを数えている間、勇希をずっと見つめる影があった

「お兄ちゃん終わった・・・」

「マジできつたねえ机だな！これで食べ物扱つていいのかよ!？」

ドアを開けた勇希を出迎えたのは大声で文句を言う二人組みの男子生徒とそれを聞いてクロスをあげる生徒達だった

「うわ・・・確かに酷いな・・・」

「クロスでごまかしていたみたいだね」

「学園祭とはいっても、一応食べ物のお店なのに・・・」

「まったく、責任者はいないのか！ このクラスの代表は誰だ！」

「え・・・！？あ、あの！・・・えっと・・・！」

「ああ！？俺達は代表に用があるんだよ、てめえは引っ込んでろ！」

「ふえ・・・！？」

何とかしようとした勇希だが、二人の怒声に腰が抜けてしまって、床に座り込んでしまった所で、奥に居た秀吉と召喚大会から帰ってきた雄二と明久が駆けつけた

「・・・明久、お前はテーブル用意して来い」

「・・・わかった、ちよつと待ってて」

雄二は明久に耳打ちすると男子二人組みに近寄った

「勇希、大丈夫じゃったか？」

「お、お兄ちゃん・・・！」

勇希は相当怖かったのか半泣きで秀吉に縋り付いた。

「なんだ、お前が代表なのガフェツ！？」

「お客様大変失礼しました、私がFクラスの代表でございます、何

かご不満でも？」

「不満も何も、今連れが殴られたんだが・・・？」

「それは私の“パンチから始まる交渉術”でございます、次には“キックでつなぐ交渉術”、最後に“プロレス技で締める交渉術”を受けさせていただきます」

「な、何をふざけた事いってやガブエツ!？」

「安心してください、ちゃんとお一人様に受けていただきますので・・・」

雄二が笑顔でそう言うつと男子生徒二人は慌てながら言った

「わ、わかった!こちらは夏川を交渉に出そう!俺は何もしないから、交渉は不要だぞ!」

「ちょ、ちょっと待てや常村! お前、俺を売ろうと言うつのか!？」

二人の名前が判明したところで、雄二は笑顔の仮面を剥がして言った

「それで?常夏コンビとやら・・・まだやるのか?」

「くっ・・・覚えてやがれ!？」

「顔覚えたからな!」

そう言いながら常夏コンビが走り去ると、生徒達が次々と声を上げた

「流石にこれじゃ、食っていく気はしないな」

「せっかく美味しそうだったんだけどね」

「食ったら腹壊しそうだからなあ」

「あ、あの・・・!」

勇希は必死に何か言おうとするが何も言えず、店に「偶然」来店していた教頭の竹原の「店を変えるか」の一言が皮切りに次々と生徒が店を出ようと立ったとき、テーブルを持った明久達が戻ってきた。

「先程は失礼しました！こちらのミスで一時的にこんな物を使っていました。ただ今本物のテーブルとお取り換えいたします！」

だが遅かったのか、客は全員店を出してしまった。

「間に合わなかったか・・・」

「いや、これで評価はそこまで下がる事はないだろう、だがまさか営業妨害が来るとはな・・・」

「・・・笑っておった？」

雄二達が話し合っている間、秀吉はずっと教頭の出た行った方向を見ていた

営業妨害（後書き）

一日一話は流石に無理か・・・？

葉月ちゃん(前書き)

葉月をようやく出せた

葉月ちゃん

「誰も来ないね・・・」

「そうじゃな・・・」

あの騒ぎの後、雄二達は召喚大会へ戻り、勇希と秀吉は客を待ったが一切来なかった。

「ただいまー」

勇希と秀吉がテーブルで喋っていると、明久が召喚大会から戻ってきた

「あ、明久お兄ちゃん」

「二回戦は大丈夫じゃったかのう？」

「うん、何とか勝てたよ」

「おめでとう、明久お兄ちゃん！」

「ありがとう、勇希君」

明久が勇希と喋っていると秀吉は雄二が居ない事に気付き、明久に尋ねた

「明久よ、雄二はどうしたのじゃ？」

「ああ、雄二ならトイレに言ったよ」

すると教室の外から雄二の声が聞こえた

「お兄さん、すみませんです」

「いや、気にするな、ちびっ子」

「ちびっ子じゃなくて、葉月ですっ!」

教室のドアが開くと雄二が勇希と同じ位の身長の子を連れ、入ってきた

「それで、探しているのはどんな奴だ？」

「お、坂本。妹か？」

「可愛い子だな。ねえ、5年後にお兄さんと付き合わない？」

「俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ」

雄二が葉月に聞くと、二人は今まで暇を持て余していたFクラスの面々に囲まれてしまった

「あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ」

「お兄ちゃん？ 名前はなんて言うんだ？」

「あう……わからないです……」

「？家族の兄じゃないのか？それなら、何か特徴は？」

雄二が聞くと女の子は少し大きな声で言った

「えつと・・・凄くバカなお兄さんなんですっ！」

「・・・明久だな」「」

「ちょっと！なんで僕なのさ！？第一僕に小学生の女の子の知り合いは・・・」

「あ！バカなお兄ちゃんです！」

葉月はそう言うのと明久に抱きつき腹に顔を埋めた

「・・・」

「・・・居なかったら・・・いいな・・・」

明久はそう言うのと葉月に言った

「葉月ちゃん・・・だっけ？どこかで会った事あったかな？」

「酷いです！バカなお兄ちゃんは葉月の事忘れたですか!？」

「そう言われても・・・ん？もしかしてあの時のぬいぐるみの子か!？」

「ぬいぐるみの子じゃないです！葉月です！葉月をお嫁さんにして

くれるって言ったのに……」

「へ……アキ、それはどういうこと？」

「明久君……？よりもよってこんな小さな子に手を出すなんて……」

「え……？ちょ、ちょっと！？これは誤解だよ！み、美波？ひ、姫路さん？僕の関節はそっちには……アツーーーー！？」

召喚大会の試合が終わった美波と瑞希が修羅の如きオーラを纏い明久に制裁を加えた。

クラスが落ち着くと、雄二たちは何故客が来ないかを話し合っていた。

「さて、「この客の少なさはどういう事だ？」

雄二の言葉に葉月が答えた

「そう言えば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」

「それは、どんな話だった？」

明久が、葉月に聞いた

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かない方が良いつて」

「はぁ・・・やっぱりあいつ等か」

「懲りない奴じゃのう」

「あいつらを探して止めないと」

すると、雄二が提案をだした

「悪い噂を流す奴らを突き止めるついでに何か食べにいかないか？」

「いいね、それ葉月ちゃんも一緒に来る？僕が奢ってあげるよ」

「いいんですか！？一緒にいくです！」

「ならワシらも行こうかのう」

「僕も行く！」

「私も一緒にしますね？」

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね？」

「よし！そうと決まれば行くか！それじゃあ葉月ちゃん、中華喫茶の話はどの辺で聞いた？」

「えっとですね……短いスカートをはいた、綺麗なお姉さんがいっぱい居るお店……」

それを聞いた瞬間、明久と雄二が反応した

「何だつて！？雄二、それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！ 我がFクラスの成功のために、綿密に調査しないとな！」

「「おおーっ！！」」

二人は猛スピードで走り去り、残された面々は呆れた顔をしていた

「アキ、最低！」

「吉井君、酷いです……」

「お兄ちゃんのバカ！」

「お兄ちゃん、明久お兄ちゃん達行っちゃったよ？」

「まったくあやつらは……」

そして残されたメンバーは明久達を追いかけた

葉月ちゃん（後書き）

やっぱり一日一話だときつい・・・

お姉ちゃんとメイド服

「嫌だ！」

「此処まで来て何言ってるのさ？早く行くよ！」

「なあ頼むよ！Aクラスだけは勘弁してくれ、此処には翔子がいるんだぞ！？」

明久達が教室の前で騒いでいると、追いかけてきた勇希達がやってきた。

「お姉ちゃんいるかな？」

「多分居るんじゃないかのう？」

「「ご主人様とお呼び！」・・・名前とのギャップが凄いわね・・・」

「メイド服かわいいです・・・」

「いいか！？俺は絶対にいか・・・」

「雄二、もう勇希君達行っちゃったよ？諦めなよ」

「くっ・・・！」

雄二と明久は勇希達を追いかけて中へ入った

「……お帰りなさいませ、ご主人様、お嬢様」

「お帰りなさいませ……って勇希達じゃないの」

勇希達を出迎えたのは、翔子と優子だった

「お姉ちゃんの服かわいいな」

「やはりAクラスは綺麗じゃのう」

「綺麗ですね」

「流石はAクラスね」

「ほら雄二、諦めなよ」

「ちっ……」

「……お帰りなさいませ、旦那様、今夜は返しません」

それを聞いた雄二が逃げようとしたり、それを翔子が捕まえスタングンを食らわせたりと騒いでいた頃、勇希は優子と喋っていた。

「お姉ちゃんの服かわいいね！」

「ふふ・・・ありがとう、それじゃ、他の皆をあそこの席に連れて行ってくれるかしら？」

「はい」

勇希は返事をするともみんなの所へ戻った

「・・・それではご注文をどうぞ」

翔子が注文を聞くと、それぞれメニューを見ながら注文した

「僕、ホットケーキセット！」

「じゃあワシもそれで」

「私はケーキセットお願いします」

「葉月もそれがいいです！」

「じゃあお姉ちゃんもそれにしようかな」

「僕は水で、セットに塩を付けて貰えるとありがたい」

「じゃあ俺は・・・」

「・・・ご注文を繰り返します、「ホットケーキセット」二点、「ケーキセット」三点、「水と塩」一点、「メイドとの婚姻届」一点以上でよろしいでしょうか？」

「待て翔子、色々言いたい事があるがとりあえず・・・」

「・・・では食器をご用意させていただきます」

すると雄二の前に実印と朱肉が置かれた

「翔子、お前どうやって家の実印を手に入れたんだ?!」

「・・・それではメイドとの新婚生活を想像しながら、お待ちください」

翔子が居なくなると、雄二は燃え尽きた

「だから・・・来たくなかったんだ・・・」

「さて葉月ちゃん、ここら辺できいたんだよね？」

しばらく食事を楽しんだ後明久は悪い噂を何処で聞いたのかを聞いた、雄二はいまだに燃え尽きている

「うん・・・不思議な頭のお兄さん達が大きい声で言ってたです」
それをたまたま聞いた優子は明久達に言った

「それならさつき・・・ああ丁度また来たみたいよ？」

「「「ん？」「」」

明久達が優子の指差す方向を見ると大きな声で悪評を叫ぶ常夏コン
ビがいた

「それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな」

「そうだな。さつき言った2・Fの中華喫茶は酷かったからな！」

「テーブルは腐った箱だったし、虫もわいていたもんな！」

「「よし、ちょっとお仕置きしに・・・」」

明久と雄二が立ち上がるが、秀吉がそれを止めた

「待つのじゃ、ワシにいい考えがあるのじゃが」

「「「考え？」」」

「姉上、ワシと勇希にメイド服を貸してもらえんじやるつか？」

「別にいいけど・・・一体どうする気？」

「まあ見ておれ」

そう言つと秀吉は勇希と共に更衣室に消えた

「作戦は以上じゃ、準備はよいか？」

「OKだ」

「ばつちりだよ」

そう言つと雄二と明久はスタンバイする

「では勇希、ワシらも行くとするかのう？」

「……うん」

勇希はちよつとビビりながら言つと、秀吉と常夏コンビの元へ向か
つた

「お客様」

「あ？さっきのメイド……じゃないな、そつちのメイドも中々か
わいいじゃないか」

秀吉は明久に耳打ちすると付けていたブラを渡した、それを受け取った明久は持っていた瞬間接着剤で坊主頭にくっつけた

「ちくしょう、覚えてろよ！？行くぞ夏川！」

「く、くそ！？これはずれねえ！」

常夏コンビが逃げると、二人は急いで追いかけた

「待て！まだ憂さ晴らし・・・じゃなかった、絶対黒幕を聞き出してやる」

「まてー！」

「勇希、大丈夫じゃったか？」

「お尻触られた・・・」

「姉上、これはワシらも奴等にお仕置きする必要があるようじゃな」

「そうね、ちゃんと捕まえてみっちりしっかり叩きのめさないと」

教室では木下姉弟の怒りが満ちていた

お姉ちゃんとメイド服（後書き）

多分もうしょっちゅう更新はできないかも、それでも見ていただけていたらうれしいです

僕と誘拐とCCC(前書き)

人質事件

僕と誘拐とココ

「お兄ちゃん、僕ちよつとトイレ行ってくるね」

「別に構わんのじゃが、早く戻ってくるのじゃぞ？客が多くなってきたからのう」

「はい」

Aクラスから帰ってきた後、店の宣伝のため、秀吉と勇希以外に美波、瑞希、葉月がチャイナドレスを着用し、しかも瑞希と美波が召喚大会で宣伝をした甲斐あって、Fクラスは客で賑わっている

「ふゝ・・・」

勇希がトイレをすまし、男子トイレから出ると、人気の少ない場所で数人の柄の悪い男に囲まれた

「僕、ちよつとお兄さんと一緒に来てくれるかな？」

「誰ですか・・・？」

「大丈夫、君のお兄さんも居るから」

「でも、お兄ちゃんは喫茶店で・・・っ!？」

「じぢやじぢやうるせえな！大人しくついて来ればいいんだよ！」

男がそう言つと、勇希の口にハンカチを押し付けた

「……っ!? ……っ! ……っ! ……」

最初は暴れて抵抗した勇希だったが、しばらくすると眠ってしまった

「ったく、暴れやがって……おい! さっさと行くぞ!」

勇希は眠らされ、学校の外へ連れ出された

「勇希はやけに遅いのう……何かあったのじゃろつか?」

秀吉が様子を見に行こうと廊下に出た時ポケットに入っている携帯に勇希から着信が入った

「もしもし? 勇希かろう?」

「よう? 木下……」

「!?!?」

なんと聞こえてきたのは勇希ではなく退学したはずの根元恭二の声

だった

「召喚戦争振りだな？木下」

「根元・・・お主が何故勇希の携帯を持っておるのじゃ？勇希に何をしたのじゃ！」

「そう怒るなよ？糞子ビなら俺の横で寝てるよ」

「一体何が目的じゃ・・・？」

秀吉がそう聞くと、根元は少し楽しそうな声で言った

「なに、ちよつとした依頼さ、邪魔な奴らをどうにかして欲しいってな、ついでに木下勇希を好きな様にしてもいいって言われたから引き受けたのさ」

「く・・・っ！」

「姫路瑞希と島田美波を連れて俺の指示した場所に来い、いいな？」

「それを聞くと思っておるのか？」

秀吉がそう言うのと根元はとても楽しそうな声で言った

「お前は動くしかないんだよ、お前の大事な弟がどうなってもいいのか？・・・ああそうだ、後島田の妹・・・葉月だったっけ？それともこっちにいるから」

「何処まで汚いのじゃ、お主は・・・！」

秀吉は悔しそうに言うと、根元から場所を聞き、クラスに残っていた康太と、丁度帰ってきた瑞希と美波に事情を説明し、康太は雄二と明久に知らせに、秀吉達は指定された場所へ向かった

秀吉達は、指定されたカラオケBOXの大部屋の前にいた

「ここね・・・」

「葉月ちゃんと勇希君は大丈夫でしょうか・・・」

「中に入ればすべて分かるのじゃ・・・」

秀吉が扉を開けて三人が中へ入ると、いきなり取り押さえられ、手を縛られた

「くっ！？いきなり何をするのじゃ！」

「放しなさいよ！」

「や、やめてください！」

「まあ落ち着け、暴れられないように手を縛るだけだ」

「お、お姉ちゃん！」

「おっと、動くなよ？」

葉月が美波に駆け寄ろうとしたが、根元が手に持っているナイフでそれを止めた

「葉月！？葉月に手をださないで！」

「大丈夫さ、お前らが大人しくしていたら手は出さない、こいつには・・・な」

「勇希は何処じゃ・・・？」

「安心しろ、此処で暢気に寝てやがる」

すると根元は手元にあったコップを持ち、中に入っていたジュースを勇希の顔に勢いよく掛けた

「・・・！・・・っ！？ケホツ・・・えう・・・」

「勇希！？」

「おはよう、糞チビ、また会ったな」

勇希はジュースが口や鼻に入ったのか、咽ながら目が覚めた

「うっ・・・ここ何処・・・？お兄ちゃん？」

勇希は秀吉の元へ行こうとしたが縛られているため動く事がままならず、周りを見ると状況を徐々に把握していき、怯えはじめた

「どこ何処……？なんで僕縛られてるの……？……っ!？」

「ようやく目が覚めたのか？糞チビ」

「あ、ああ……!？」

勇希はあの時の事を思い出したのか根元の顔を見た途端、今にも泣きそうな顔になっていた

「本当に久しぶりだな？何ヶ月……俺をちゃんと見る!」

「えう!？」

根元は勇希の髪の毛を乱暴に掴むと無理やり自分と目を合わせさせた

「勇希に何をするのじゃ!？」

秀吉が叫ぶが根元は無視して続けた

「俺は退学になったあの日からお前の顔を忘れた事はない、お前は
どうだ？」

根元が聞くが勇希は完璧に怯えており何も言う事ができなかった

「何も言わないか……まあ、それでもいいがなっ!」

「あつっ!？」

「勇希!？」

「「勇希君!？」」

勇希は根元に腹を蹴り飛ばされ、床で蹲っていた

「うう・・・」

「まあ俺からはこんなもんでいいだろう、後はあいつ等に可愛がってもらうんだな、ははは!」

根元がそう言うのと部屋のドアから太った男二人が中に入り、勇希を見ていった

「こ、この子がそうだね？」

「ほ、本当にいいのかい？」

「ああ、存分に犯すといい」

「「「なっ!？」」」

根元がそう言うのと秀吉達が驚愕の声を上げ、男二人は勇希を運ぼうとする、そこへ店の従業員が入ってきた

「・・・失礼します、灰皿をお取替えいたします」

「おっ」

そう言うのと従業員は古い灰皿を新しい物へ取り替えると根元の後ろを通りながら、秀吉達に目を合わせた

「……………(コク)」

「「「「!」」」」

三人が何かに気付くと男二人が勇希を抱え部屋を出ようとした

「や、やだあ……!お兄ちゃん……!」

「勇希!？」

「そ、それじゃあ隣の部屋でみんな待つてるからびい!？」

「ど、どうしたい!？」

勇希がうめくような声で秀吉に助けを求めたが何もできず、秀吉の涙混じりが叫びが響き、片方の男がが部屋のドアを開けると二人は奇声を上げ、吹き飛んだ

「な、なんだ!？あ、あんたは!？」

「「「西村先生!」」」

「遅くなつてすまないな、吉井!坂本!早く皆を連れて学校に戻れ」

「て、鉄人!？」

「俺達にもやらせてください!」

雄二達がやらせてくれと言うが、鉄人は前を向いたまま答えた

「ここからは、先生であり、大人である先生の仕事だ、お前達は皆を早く学校に連れて行け」

「・・・わかりました」

「雄二！？」

雄二の返事に明久は驚きの声を上げるが雄二はそれを無視し、皆の縄を解こうとしたが、そこで根元は葉月の顔にナイフを突きつけて言った

「葉月！？」

「お前ら全員動くな！動けばこいつの顔に傷がつぐえ！？」

「・・・っ！・・・っ！・・・っ！」

しかし後ろで立っていた従業員が持っていた灰皿で根元の頭を殴り、倒れてからも何発も殴り続けた

「お姉ちゃん！」

「葉月！よかった・・・！」

「ちょ！ムツツリーニ！？流石に死んじゃうよ！」

根元が倒れた隙に葉月は美波に駆け寄り、縄が解かれた美波はそれを抱きしめ、明久は根元を殴り続ける従業員に変装していたムツツリーニを止めた

「木下、勇希を頼む」

「ありがとうございます！西村先生」

「・・・すまなかったな、遅くなって」

「いえ・・・」

「うう・・・鼻が・・・」

勇希は男の手から落ちた時顔から落ちたのが、鼻血を出しており、秀吉は勇希の鼻にティッシュを詰めてやり、安心した表情で縄を解き、抱きしめながら勇希に話しかけた

「大丈夫じゃったか？」

「うん・・・」

「よかったのじゃ・・・歩けるかのう？」

「うん・・・あわわ!？」

勇希は連れて来られた時嗅がされた睡眠薬がまだ残っているのか歩こうとしたが、ふらついて尻餅をついてしまった、

「まったく・・・仕方がないのう」

「お、お兄ちゃん!？・・・ありがとうございます／＼」

秀吉は何処か嬉しそうな表情で勇希をお姫様抱っこし、勇希も最初

は驚いたものの顔を赤くしながらお礼を言った

そして皆が、部屋から出た後、中に残っていたのは、鉄人と犯人達
だった

「さて・・・お前達、分かっているんだろうな？」

「「「「「!?!?」「」「」「」

「お前達には特別にCQCと言う物を教えてやる・・・実践でな」

「「「「「・・・」「」「」

「私の生徒に手を出した事を後悔させてやる!!!!!!!!!!!!!!」

「「「「「い、いやぁ—————!?!?」「」「」

雄二達は無事、学校へ戻り一日目の喫茶店を無事終わらせ、勇希と

優子は保健室にいた

「勇希、本当に大丈夫？」

「うん、大丈夫！」

「本当に、無事でよかったわ」

「そう言えば、秀吉から手紙預かってるわよ？」

「お兄ちゃんから？」

「なんでも、西村先生から渡すように渡されたんですって」

「へっ……」

秀吉から話を聞いたとき「ちょっと殺しに……」と言い出し暴れだした優子を秀吉は全力で阻止し、疲れたのか手紙を優子に渡し、先に家に帰っていた

「さて、私達も帰りましょうか？ついでにデパートに寄って今日のご飯の材料買いに行きましょう」

「はい」

勇希は何か入っているのか、少し膨らんだ封筒を鞆に入れると優子と一緒にデパートに向かった

その頃、鉄人は学校の教師用更衣室でシップを体中に貼っていた

「やはり、格闘戦は趣味じゃないな・・・イタタッ！」

僕と誘拐とCQC（後書き）

どうも、これを書いていたら勇希レイプフラグが立ってしまっ
てど
うしようか悩んでいた作者です。清京祭が終わったら全年齢版の「
ある弟の日常」みたいな感じで短編書こうと思います

清京祭が終わる時（前書き）

書き直した

清京祭が終わる時

「少し遅くなってしまったのう」

「みんな居るかな？」

清京祭二日目、秀吉と勇希はそんな会話をしながら教室に入った

「皆もう揃っておるのう、おはようじゃ」

「おはよー」

「あ、秀吉に勇希君！おはよう」

明久が続いてみんなが秀吉達に挨拶し、明久が心配そうに言った

「秀吉と勇希君は良く眠れたかい？」

「うん！」

勇希が返事をするに隣で秀吉がニヤニヤしながら言った

「ほう、昨日ワシが寝てる時に、丁寧に枕持参でベットに潜り込んで来たのは誰じゃったかのう・・・」

「お、お兄ちゃん！？それ言っちゃ駄目！」

「ははは、あんな目に遭ったんだから仕方ないよ、今は大丈夫？」

「う、うん・・・／＼」

勇希は秀吉の口を塞ごうとしたが身長が届かず、みんなの心配そうな視線を浴びると小さく返事をして秀吉の後ろに隠れてしまった。

「さて！皆が来たところで喫茶店の準備を始めるぞ？」

皆が話していると、奥から雄二がやって来た

「あら、いいの坂本？召喚大会は？」

「なに、試合は昼の一時からだ、ギリギリまで手伝うよ、そのためにさっき補充テスト受けてきたんだからな、な？明久」

「そうだね」

「そうなの？ありがとう」

「ありがとうございませす」

雄二達が話していると、秀吉は「そうじゃ」と言い、雄二達に話しかけた

「昨日の夜に姉上から聞いたのじゃが、召喚大会で姉上達にどうやって勝ったのじゃ？姉上は随分悔しそうにしてたのじゃが・・・」

「ああ、それは雄二とムッツリー二の御蔭だよ」

「？一体どういう事じゃ？」

「それはね……」

そう言うと明久は説明を始めた

「ムッツリーニが試合前に考えた愛の告白を、霧島さんに雄二が言つて、それを聞いた霧島さんが雄二に気がいつている内に、ムッツリーニが僕の代わりに審判にばれない様に召喚して、秀吉のお姉ちゃんを倒して、僕が霧島さんに試合を放棄するように頼んで、それを了承した霧島さんは試合を放棄、僕達の勝利！てことだよ」

それを聞いた秀吉は疑問に思い、明久に聞いた

「じゃが、何故試合放棄を了承したのじゃ？Aクラスの代表なら雄二と明久などどうということもなかるう？」

「雄二が何とかしてくれたのさ！ね？雄二」

「雄二よ、お主は一体何をしたのじゃ？」

秀吉が雄二を見ると、何処か遠い目をした雄二が居た

「その事は話したくない……」

「お主も大変じゃのう……」

この後葉月もやって来て、皆で色々話している内にチャイムが鳴り、清京祭二日目が始まった

雄二と明久も召喚大会に出発してしばらく経った頃、Fクラスはか
なりの込み具合だった

「お兄ちゃん、凄い数のお客さんだね」

「多分、召喚大会の御蔭じゃな」

「注文お願いしまーす」

勇希が客数の数に驚いていると、テーブルから注文が来た

「うむ・・・ワシは今手が離せんから勇希が行ってくれんかのう」

「はい」

勇希は返事をする、オーダーを聞きにテーブルに向かった

それから数十分位経った頃、客の数が更に増えFクラスはまるで戦
場の様になっていた

「お兄ちゃん・・・僕もう駄目・・・」

「葉月も疲れたです・・・」

「もう少し頑張るのじゃ・・・」

「でも、この数は凄いですね」

「ウチもこれは疲れるわ・・・」

秀吉達が奥で休んでいると客の声が聞こえた

「確か、召喚大会で優勝した人のクラスってここだよな？」

「おー！召喚大会で出てた可愛い子だ！」

「あそこの二人居るちっちゃい子かわいい〜！」

その声を聞いた途端さっきの疲れが嘘のように皆立ち上がった

「お兄ちゃん！明久お兄ちゃん達優勝したんだって！」

「やったー！」

「やりましたね！」

「流石、アキ達ね！」

「これは、ワシ達も頑張らねばならんのうー！」

「「「「おー！」」」」

その後、明久と雄二により花火が校舎に直撃し、校舎の一部が破壊

されるなどのハプニングがあったが、処罰は嚴重注意だけに留まり、無事清京祭も終わり、皆で、学校の近くの公園で打ち上げをしていた

「まったくお主等は無茶をしよるのう・・・」

「綺麗だったね」

「いや、流石の僕も今回は危なかったね」

「ま、学園長に借りを作っておいた御蔭だな」

「もう！あんまり無茶しちゃ駄目なんだからね？」

「分かってるよ美波」

明久はそう言い周りを見ると姫路が居ない事に気付き、皆に聞いた

「そつえば姫路さんは何処に行ったの？」

「ああ、瑞希ならお父さんの所へ行つたわよ？」

「そうか・・・お父さんの気が変わればいいけど」

「大丈夫だよ！明久お兄ちゃん達が凄く頑張つたんだもん！」

明久達が瑞希を心配していると勇希が元気付ける様に言い、皆はそれをみると少し表情が和らいだ

「あ、瑞希お姉ちゃんだ！」

しばらく皆で話していると、勇希が走ってくる瑞希に気付き知らせた

「姫路さん！どうだった？」

皆が心配する中、瑞希は俯いていた顔を徐々に上げ、顔には笑顔があった

「お父さんも分かってくれました！転校しなくて大丈夫です！」

その返事を聞くと皆安心したのか、表情を明るくさせた

「よかった〜・・・」

「良かったわね、瑞希」

「瑞希お姉ちゃん良かったね〜」

「皆・・・ありがとうございます！」

「よし！皆揃った事だし、打ち上げ再開しようか！」

「」「」「おお〜」「」

瑞希が皆にお礼を言うと、明久達は打ち上げを再開した

「・・・勇希」

「？翔子お姉ちゃん？」

「そのプレミアムチケットを譲って欲しい」

「これ？」

勇希は雄二から、優勝商品のチケットを譲り受けていた

「でも雄二お兄ちゃんが渡しちゃ駄目だって・・・」

「代わりにこれをあげる」

「!？」

ポケットから出された翔子の手には、如月グランドパークのファミ
リーチケットが握られていた

「それをくれたら、これをあげる」

「で、でも・・・」

「お姉ちゃんとお兄ちゃんに行きたくないの？」

「はい！」

勇希が欲望に負けるのは早かった

「ありがとう、じゃあね」

「翔子お姉ちゃんありがとうー！お兄ちゃんー！」

「……これで雄二と／＼／」

清京祭が終わる時（後書き）

どうも、BFB C2をやっていたら書くのが遅れた作者です
とりあえずは書き終わりました。これからは短編書いていくつもり
です。リクエストも受け付けます、勇希と誰を絡ませるかとしちゅ
ーションと一緒に感想の方にも書いてください、書けるよ
うなら書きます、18禁のリクは勇希×秀吉×優子限定なのであし
からず

短編「プールと勇希と水着」・前編（前書き）

短編は本編と書き方を変えてみました！本編では心の中の表現は一切使用していませんが、こちらでは反対に心の声オンリーで行きます、

短編「プールと勇希と水着」・前編

朝、秀吉視点

ジリリリリ!

「うん・・・ふあ〜!」

もう朝じゃったか・・・まったく、最近暑くなってきたてよく眠れんわ

ジリリリリ!

「まったく、うるさい目覚ましじゃわ」

ジリリ・・・

これでよし、さて早く着替えて朝食を作らねば・・・そうじゃ!もう暑くなってきた事じゃし、勇希を連れてプールに行くのもいいかもしれないわ

「~~~~・・・うむ、これで良いじゃ」

さて、朝食も出来たことじゃし勇希を起こしに行くかのう

「勇希〜！早く起きるのじゃ！学校に遅刻してしまうのじゃ」

「う〜ん・・・お兄ちゃん後・・・」

「今日は勇希の好きなホットケーキじゃぞ？」

「・・・起きる」

まったく、素直な弟じゃのう

「なら早く着替えるのじゃ、ワシは姉上を起こしてくるかのう」

「はい・・・」

さて・・・次は姉上じゃな

ガラッ！

「おはようじゃ・・・なんじゃ明久？随分とだれておるのう？」

明久は随分と疲れておるようじゃのう

「おはよう秀吉に勇希君〜、実はこの週末に雄二と二人だけでプー

ル掃除させられる事になっちゃってさ」

プール掃除・・・ん？雄二が来たようじゃのう

「まあ鉄人も代わりにプールを好きに使ってもいいと言ってたんだ、俺達だけでプールを貸しきれんだぞ？どうだ？秀吉達も来ないか？」

ふむ・・・丁度いいかもしれん・・・は！？もし家族で行く場合は姉上×勇希×ワシじゃが学校のプールなら姉上が消えてワシ×勇希に・・・ふ、ワシは天才かも知れんのう・・・

「うむ、なら行かしてもらおうかのう」

「やったー！」

「ムツツリーニも・・・」

「洗剤とブラシを用意しておけ」

これで勇希の写真が増えるのう、ん？雄二は姫路達も誘うようじゃな、まあ明久がいるのじゃから来るじゃろうな

「それでは勇希、帰りに新しい水着でも買いに行くかのう？」

「うん！」

勇希がどんな水着を選ぶか楽しみじゃのう

そんな訳でデパートの水着売り場に来た訳じゃが・・・

「勇希、欲しいのは見つかったかのう？」

「お兄ちゃん、僕これがいい！」

勇希・・・水玉模様のフリフリスカートが付いた水着とは中々な物を選んでくるのう

「サイズは大丈夫じゃったか？」

「うん！店員さんが測ってくれたから大丈夫」

それなら問題無しじゃな、勇希の水着姿・・・楽しみじゃ

「なら会計を済ました後にワシも水着を選ぶかのう」

短編「プールと勇希と水着」・前編（後書き）

頑張っ
て短く
したけ
どなん
だか無
理やり
感が…

短編「プールと勇希と水着」・中編（前書き）

誰か勇希の絵を書いてくれる人はいませんか!?

短編「プールと勇希と水着」・中編

「おはよう、みんなー！」

む、明久はようやく来たみたいじゃな

「おはようございます、吉井君！いいお天気で良かったですね」

姫路も楽しみにしていたみたいじゃのう、まあワシ達もなんじゃが・
・

「ワシと勇希も、この日の為に水着を新調してきたぞ」

「え！？どんな水着！？」

「ワシはトランクスタイルじゃ」

「男物じゃないかつ・・・！」

「・・・みそこなっただっ！」

何故そこまで悔しがるのじゃ・・・？

「そ、そうだ！勇希君はどんな水着？」

「・・・」

まったく、ムツツリーニも目を輝かせよって・・・

「・・・秘密／＼」

じゃからな勇希？ワシの服を掴みながらその顔で言つのは反則じゃと何度も・・・

「バカなお兄ちゃん！おはようですっ！」

「おお、葉月ちゃん」

「ごめんね？この子っいたら付いて来るって聞かなくて」

「葉月ちゃんおはよう」

「勇希君もおはようですっ！」

「よし、これで全員揃ったな」

雄二達も来たようじゃな

「それじゃ、皆水着に着替えてプールサイドに集合だ」

「はい！」

「では、ワシらも行くつかのう？」

「うん」

秀吉更衣室は便利じゃな

着替えは見せんぞ？

さて、着替え終わったことじゃし早くプールに行かねば

「勇希〜早くするのじゃ〜」

「お兄ちゃん待って〜／＼／」

うむ・・・やはりフリフリの付いたスカートが高ポイントかのう？

「どうしたのじゃ？もう皆集まっておるぞ？」

「うう・・・ちょっと恥ずかしい／＼」

まったく、恥ずかしがりよって・・・かわいいのう

「別に大丈夫じゃよ」

さて、プールサイドに入るかのう

「すまぬ！待たせたのう」

「もう、鼻血も出ない」

「・・・打ち止め」

明久とムツツリーニは何を言っておるのじゃ？

「皆揃ったかのう？」

「木下！あんた何処までウチらの邪魔をすれば気が済むの！？」

「卑怯です！油断させておいて最後に裏切るなんて！」

二人まで、何を言っておるのじゃ！？

「お姉ちゃん、かわいいです！」

「ワシは見ての通り男じゃぞ？」

「でもその水着女の子用ですよ？」

なん・・・じゃと・・・？

「ワシは店員に普通のトランクスタイルが欲しいと言ったのじゃぞ
!?!」

「何も知らない人は女物を勧めると思いますよ?」

「そうね・・・あれ?木下、勇希君は?」

「む、さっきまで一緒に居たのじゃが・・・ああ居た、勇希!隠れ
てないでこっちに来るのじゃ」

「・・・//」

ガシッ!

だからじゃな勇希?そんな恥ずかしそうな顔をしながら抱き付かれ
るとワシも色々和我慢を・・・

「勇希君かわいいですね、その水着も店員さんが選んだんですか
?」

「多分そうですよ」

「この水着は勇希が自分で選んだのじゃぞ?」

まあ、そう思うのも当たり前じゃのう

「ええ!?!」

「勇希君かわいいですっ!」

「勇希君は女物も着るんですか？」

「そうじゃな、勇希は普段の私服でもスカートとかも着よるしのう」

「意外・・・でもないわね」

「まあこれも父上と母上の英才教育の御蔭じゃがな」

パンツも着る服によっては、女物を穿く事は黙っておくかのう・・・ちなみに勇希のお気に入りは尻にクマの絵がプリントされたパンツじゃ

「それにしても、明久とムッツリーニは随分と静か・・・」

「・・・もう死んでいいかも」

「・・・（ビクッ、ビクッ）」

鼻血で水溜りが出来ておるが・・・大丈夫かのう？

短編「プールと勇希と水着」・中編（後書き）

何故勇希が女の子用の水着を着れるか・・・それは着替え中に秀吉が勇希にあることをしたから

短編「プールと勇希と水着」・後編（前書き）

終わりだよ！よ！

短編「プールと勇希と水着」・後編

「それー！」

「あははは」

「わ、わわっ！わぷっ！？」

「やったー！勇希君の負けですー！」

「相変わらず勇希はどんくさいのう」

今はワシと勇希と葉月ちゃんとでビーチボールで遊んでおるのじゃ

「うっ・・・鼻に水が入っちゃったよ」

「浮き輪ごと逆さまになったからのう」

「勇希くん大丈夫ですか？」

本当に勇希はドジじゃのう、そういえば雄二達は何処に・・・なん
で目隠しされた上で拘束されとるのじゃ・・・？

「勇希君、勇希君」

「？」

「あれ・・・」

ん？勇希と葉月ちゃんは・・・何故姫路の胸を見つめているのじゃ？

「大きいです・・・」

「お兄ちゃん、僕も大きくなるかな？」

葉月ちゃんは分かるのじゃが・・・

「勇希は男じゃから、そこは大きくならんわ」

「うっ・・・お兄ちゃんは、大きい方が好き？／／／」

ああ・・・勇希よ、その表情でそんな事を言われたらもうワシはど
うすればっ・・・！

「わ、ワシは勇希見たいな胸も好みじゃよ？」

「・・・／／／」

だからの勇希、そんな顔で抱きついてくるのは・・・

ああ、ワシもう死んでもいいかもしれんのう・・・

「お兄ちゃんお腹すいた〜・・・」

「僕も泳いだらお腹すいちゃったな」

うむ・・・もうそんな時間じゃったか

「それでしたら、丁度いいものがありますよ？」

ん？

「ちょっと失敗しちゃって、人数分用意出来なかったんですけど・・・」

「「「「「!?!?!?!?!」」」」」

ま、まさか・・・

「実は朝作ったワッフルが四つ・・・」

「第一回!」

「最速王者決定戦!」

「「ガチンコ水泳対決!」」

「「「イェーイ!」」」

「おいしそう・・・瑞希お姉ちゃん、これ食べてもいい?」

「別に構いませんよ？」

よし、この勝負に勝って・・・勇希！？お主は以前に姫路の弁当を食べて・・・！

「やったー！いたたまーす」

遅かったか・・・

「お、おい秀吉・・・」

「勇希君が・・・」

「勇希はお菓子や甘いものが大好きじゃからのう・・・」

「あう・・・」

ポテッ

「ゆ、勇希君！？どうしたんですか！？」

「大丈夫じゃよ姫路、多分朝から一杯食べておったから気分が悪くなったのじゃろう」

やはりあのワッフルも相当の威力があるみたいじゃな・・・じゃが、勇希の御蔭で一つ減って三つ・・・帰ったら何か好きなものを作ってやらねばのう

「そつなんですか？」

「うむ、ではワシは勇希を寝かせてくるのじゃ」

「お、お兄ちゃん・・・」

「なんじゃ？」

「僕・・・お兄ちゃんとお姉ちゃんの作ったワッフル食いたい・・・」

ふふ・・・作るものはワッフルで決まりじゃな

さて、もう夕方になって皆着替える為に一旦別れたのじゃが・・・

「・・・」

「困ったのう」

勇希が待つとる間に寝てしもつた・・・

「ほれ、勇希？もう帰るから起きるのじゃ」

「うん・・・」

はあ・・・まったく仕方の無い弟じゃ

「待たせたのう」

「あれ？秀吉勇希君は？」

「ワシの背中で寝ておるのじゃ」

「勇希君疲れちゃったんですね」

「それじゃ、帰るか」

ふふ……ワシも早く帰って姉上とワッフルを作らねばのう

短編「プールと勇希と水着」・後編（後書き）

書き終わったときに気付いた、愛子と美春を忘れてた！

・・・まあなんとかなるか

後twitter始めました、来てくれる人なんて居ないと思いますが、良ければ来て下さい、名前はvnakotovです

僕と合宿とお風呂覗き（前書き）

凄く・・・短いです

僕と合宿とお風呂覗き

「おはようじゃ」

「おはようー」

二人が教室に入ると、雄二と明久が話しかけてきた

「おはよう、秀吉に勇希君」

「ああ秀吉に勇希、いいところに来たな」

「一体どうしたのじゃ？」

「？」

「なるほど・・・」

説明を受けた秀吉は状況を理解したのか、軽く頷いた、勇希はあまり理解できなかったのか秀吉の隣で「へへ」と言ったまま黙った

「要するに、明久は盗撮写真で脅されて、雄二は召喚大会の時のプロポーズが録音されておって、オリジナルの音源を消さないといのままでは危ない・・・と言うわけじゃな？」

「うん、それで今ムツツリーニが犯人を探してくれてるんだ」

「お主等も災難じゃのう」

「笑い事じゃないよ！このままじゃ安心して明日の強化合宿にも行けないよ！」

「落ち着け明久、今はムツツリーニを信じて待つしかないんだ」

「うん・・・」

「全員席に着けー！今から明日からの強化合宿のしおりを配る！」

しばらくして、鉄人が教室に入ってきたのに気づき、みんな席に着いた

「このしおりを見れば、ほとんどの事は分かるはずだ」

「楽しみだね、お兄ちゃん！」

「そうじゃな」

「こら！木下に勇希、私語は慎め！」

秀吉と勇希は注意されると静かになり、鉄人は説明を続けた

「後、集合場所と集合時間は絶対に間違えるなよ？他のクラスとは
違い、我々Fクラスは現地集合だからな」

「……な、なんだって……!?」「……」

それを聞きクラス全体が驚きの声が響き渡った

「せんせー!」

「なんだ?」

「おやつは何円までですか!?!」

「……」

僕と合宿とお風呂覗き（後書き）

多分この話から更新頻度下がるかも・・・

いないと思うけど、詳しく知りたい人は私のブログでもみてつかあ
さい、プロフにURL貼ってるので

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7818k/>

バカとテストと召喚獣～とある弟の物語～

2010年10月14日17時00分発行